紅蓮の鬼ノ壱　於仁丸出奔

あんのーん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
紅蓮の鬼ノ壱　於仁丸出奔

【Ｎコード】
Ｎ２４９６Ｅ

【作者名】
あんのーん

【あらすじ】
戦国時代揺籃期の関西、とある山村に住む素破の少年於仁丸は美しい少女篝と恋仲であったが、ある時突然、これを隣国領主に惨殺されてしまう。一方於仁丸の幼馴染み戌郎が仕える鴇姫は主家の姫であり、隣国領主の弟を慕っていた――

序

里山を深く分け入った森の木々の梢を、四つの影が疾風のように駆け抜けていく。

否、ひとつの影がほかの三つに追われているのだ。

追われている影は他のそれに比べると小さいが、それでも猿（ましら）よりは大きい。果たしてそれは、ひとの影であった。

野良着姿の少年と、それを追う忍装束の男三人――

なぜ、こんなことに……なぜわしが追われるのや……

少年は混乱した頭で考え続けていた。その間にも足は幹を蹴り腕は枝を捉え、ひとともも思えぬ身のこなしで木間を移動している。

己れになぜこんなことが出来るのかさえ理解できない。

わしはただの、百姓や……それやのに……

何より理解できなかったのは、いつの間にか両手の指に嵌っていた「指貫」だ。

それを手渡されたとき、お守りかまじないの類だと思った。懐に入れていたはずが、こうなった後に気がつけば両手にあった。そればかりか……

男の手から手裏剣が放たれる。振り向きもせず少年の腕が大きく動いたかと思うと、手裏剣は少年に触れることもなく男達をめがけて跳ね返されてきた。

「あやつ」

ひとりが小さくごちた。

「わしらを謀りよったか」

「そうではあるまい」と、もうひとりが答える。

「体が勝手に、覚え込んだ動きをなぞっとるだけや……あれの記憶が戻っとるなら、こんなもんでは済まんぞ」

四つの影は絡みあいながら、ムササビの如き速さで森の奥へと姿を消した。

1

畦道を一組の少年と少女が歩いている。

少年は袖付けの少し下を縫い詰めた上衣を着ていた。歳の頃は十五かそこら、腰には鎌をたばさみ背には背負子を背負っている。少女は少年よりふたつみっつ幼く見え、麻の単衣に腰籠（ハケゴ）を下げていた。無造作に前髪を束ねた赤い髪紐が、質素ななりの少女の唯一の飾りであったろうか。それは少女の整った顔によく映えていた。

村人が野良仕事の手を止め、ふたりを見やった。

於仁丸（おにまる）と篝（かがり）――ふたりはここ、黒髪村でもひときわ目立つ美しい見目をしていたが、村人がふたりを見たのはそれが理由ではない。幼い頃から折りさえあれば一緒にいるふたりの仲の睦まじさは村人の誰もが知るところであったが、ふたりを見るその目に一抹の憐れみがあることを、於仁丸も篝も敏感に感じ取っていた。

だがそれを口にしたことはなく、素振りに見せたこともない――

ふたりは村人の視線を意に介するふうもなく、畦道を山へと向かった。

周囲を深い山谷に囲まれ、近隣と交わることもなくひっそりと暮らしを営んできた黒髪村はこの地方の国人、雨宮知徳（とものり）の隠し里であり、村人は代々主家を守るために仕えてきた素破であった。このところは大きな戦もなく、ゆえに於仁丸と篝もこうしてふたりのときを過ごせるのだが、この村で育ったふたりはやはり素破、それぞれが技を幼い頃より仕込まれていた。すなわち於仁丸は糸術、篝はその身のうちに蓄積された毒である。

ことに篝は最初から閨房での毒殺を目的に毒を以て育てられた少女であり、どんなに好きあった仲でもふたりが添い遂げることはできまい、というのが、村人の視線の意味であった。

「篝、見つけたぞ。これでええんか？」

山の中腹、刈り取った下草を手に於仁丸が声を上げた。
「うん？……ああ、よう似とるけど、これは違うわ」
手元を覗き込んだ篝が笑いながら答える。
「ホラ、葉っぱの形が違うやろ？」といわれても、於仁丸にはその違いがよくわからない。
「あかん……毎度ちょっとは篝の手助けができるかと思うんやけど」
お手上げや、という風に両手を広げてみせる於仁丸に、篝はまた笑った。
「すぐにわかるようになるて。於仁丸がいっつも手伝うてくれて、ほんまに助かってる……ありがと……」
花のような笑顔だ、と於仁丸は思った。
見慣れているはずなのに、見るたびに胸が震え、頬が熱くなる。
思わず視線を移した先にアケビを見つけた於仁丸は片手を上げ、手招くような仕草をした。ひゅっ、と一条の光がその指先から走り出る。と、見る間にアケビが折り取られ、まるで生きもののように於仁丸の手元へと吸い寄せられてきた。この年は冷夏で作物の実入りは悪く、山の実りも良くなかったから、これはちょっとした僥倖であった。
「食べえ。よう熟れとる」
於仁丸はそれをふたつに割ると篝に手渡した。
「於仁丸は……？」
「わしはええ。次に見つけたら貰うから」
「……ありがと」
篝は素直に礼を言った。
幼い頃から毒を用い、それにあたって死にかけたことも一度や二度ではない篝は今でこそ人並みの体力を得ていたが、体はまだ小さく華奢であった。
於仁丸はまだ幼い頃から、いつもそんな篝を気遣っていたのだ。常に自分に対し心を砕いてくれる於仁丸が、篝には涙ぐみそうになるほど愛しく、有難かった。

そうして半時ほども柴を刈り薬草を探していたが、林の中に深紅を見つけ、於仁丸は緩んだ頬を引き締めた。
「……死人花」
不快そうな声音に、篝は振り返り、於仁丸の視線の先を見た。
赤い花が咲いている。
「……」
「なんでこんなとこに……誰ぞ行き倒れでもしたんか」
眉を顰め、そういう於仁丸に
「於仁丸はあの花が嫌いなんか」
と、篝がひとりごとのように訊ねた。
「うちは好き……きれいな花やんか」
「あれは死人の血を吸って咲く花やぞ」
おぞましげに於仁丸が答える。
毒の、という言葉は呑み込んだ。篝を前にその言葉を口にするのは憚られた。
「あれは薬にもなるんやで。何でもそうや。毒でも用い方で薬になる……」
於仁丸の心を知ってか知らずか、篝はあっさりとその言葉を口にした。
「……わしはごめんや。死人花で作った薬なんぞ、いらんわ」
子供のような口ぶりに篝が微笑む。
「今はええけど」と、しばらくの後、篝は再び口をひらいた。
「於仁丸の父御も母御も先の戦で死にやったんやろ？うちの親も、多分そうや……どこで朽ちたのかもわからん……
うちらかて……いつまた戦になるか、わからんやろ……」
「……」
「そやけど、骸から花が咲くなら、ちょっとでも慰められるやろ。花を見たら、思い出してもらえるやろ」
「……篝」
「うちも」

「辛気くさい話はやめえ！」
於仁丸の怒気を孕んだ声が、鋭く籌の言葉を遮った。
普段自分に対し声を荒げたことなどない於仁丸の厳しい言葉に、籌はびっくりしたように顔を上げた。於仁丸がその頭を抱きかかえるようにして、己れの胸に押しつけた。
「於仁丸……？」
「戦が起こったらなんやていうんや……わしがおまえを置いて死んだりするか」
頭を強く押しつけられ、於仁丸の表情は見ることはできない。
「……」
「おまえもや……絶対、死なせたりせん。おまえはわしが、きっと守ったる」
「於仁丸……」
「ずっと一緒や。いつまでもや……そやからもう、あんな花のことなんか考えんな」
とくとくと、於仁丸の鼓動が籌の体に響いてくる。
ふたりの体がひとつに溶け、於仁丸の熱が籌の内に流れ込んでくるようだ。
「……うん……」
籌が眼を閉じ、答えた。
戦火は遠のいたとはいえそれは一時のことであり、いつまた戦に明け暮れる日が来ようとも知れぬことは於仁丸にもよくわかっている。
それだけに籌が日々の笑顔の裏、心の奥底で、自分たちの死について考えていたことが不憫だった。
於仁丸は一方の手を籌の腰に回し、両手でしっかりと籌を抱きしめた。
その夜のことである。
秋のとば口とはいえ、山里の夜は冷える。

小さく咳き込みながら囲炉裏の火を立てていたお爺(じじ)に、於仁丸が包みを差し出した。
「うん？なんや？」
開いてみると、いささか不格好な丸薬である。
「わしが作ったんや……服(の)んどけ。夏頃から変な咳しよるやろ……」
ことさらに仏頂面で答えた於仁丸だったがほんのりと頬は赤く、照れているのがわかる。
物心ついた頃にはすでに親はなく、於仁丸はお爺に育てられたようなものであった。於仁丸にとってお爺はただひとりの肉親であり、篝同様、かけがえのない存在だったのである。
「おまえがか？それはまた、怪しい代物であることやな」
お爺は笑いながらからかうようにいったが、目は愛おしげに丸薬を見つめている。しかし於仁丸はその目の色に気づかず、お爺の言葉にかっときたらしい。少しばかり声を荒げ、
「篝の処方や、間違いないわ！ええから黙って服んどけて」といった。
「……そうか。篝の……」
お爺はかすかに笑うと立って甕(かめ)から水を汲み、丸薬を一粒口に放り入れた。
「篝もこの頃では、お婆(ばば)の役によう立ちよるようやな」
「……なあ」
於仁丸が口を開いた。先刻とはうって変わった、ほんの少しの甘えさえ含んだ声だ。
「わしももうじきに一人前や……篝のこと、お爺からもお婆によう頼んでくれよ」
「……夫婦(みょうと)にか」
お爺が振り返った。先刻の笑みは消えている。
「まだそんなことを考えておったのか……篝と添うても子は作れんぞ」
またそのことか、と於仁丸もうんざりした顔になった。村人の視

線に知らんぷりはできても、身内にいわれるのは業が沸く。
「子ぉなんぞいらんわ。わしは籌がおったらそれでええ」
これまで考えてはいても口にしたことのなかった祝言について、唐突に切り出したのには於仁丸なりに理由があった。昼間の籌の様子が胸につかえてしかたがなかったのだ。
いつもそばにいてやりたい。それが叶わないなら、確かな絆で安心させてやりたかった。
「そうはいかんぞ。技は引き継がれねばならん」
お爺の言葉に
「跡継ぎがいるんやったら」
と、於仁丸はたたみかけた。
「スジのええのを養子にでもとったらよかろう。他の女を娶っても出来のええのが生まれると限った訳やなし、その方がよっぽど理に適(かの)うとるやろが」
「……」
「お爺、なあ……」
「その話はまた今度や」
みなまでいわぜずお爺は話を切り上げた。
「何が一人前や。おまえにはまだ早いわ」
どうせ最初から二つ返事で首を縦に振る訳もない。於仁丸も黙った。
しばらくの後、お爺は話題を変えるようにいった。
「そういえば鴇(とき)様は、この頃(あのつ)天津の次男坊と仲良うしてなさるそうやな」
鴇様、というのは黒髪村の主家である雨宮家の姉姫、鴇のことだ。見目美しく心根は優しく、気さくで飾らない人柄は村人にも慕われていた。
また天津とは隣国の守護代、天津家のことであった。天津の嫡男幸政は、謀(はかりごと)に長けているが嗜虐を好むというのが近隣に聞こえた噂である。

そして弟の幸隆は……たしか隻眼跛行の不具者ということではなかったか……

「……

鴇様が……」

於仁丸がつぶやいた。

……戌郎のやつ、それはさぞや気を揉んどることやろうな……

鴇姫の下男である戌郎は幼馴染みでもある。於仁丸は戌郎の、鴇姫への主に対するもののみではない秘かな思いを知っていた。

2

鴇姫が天津幸隆に初めて会ったのは、ふた月ばかり前のことになる。

旅装姿の幸隆が供も連れず、ふらりと雨宮の屋敷を訪ねてきたのだ。近隣の旅の途中だといい、この地へ入ったなら雨宮家へ挨拶に行くように、と父から言付かったといった。

両家のつきあいは古く、雨宮家は形は天津家に対し礼をとっていたが、実際は拮抗した力を以てこの地方を治めていたのである。元々雨宮領は山々に囲まれ、公の支配がなかなか及ばぬ土地柄であった。

雨宮知徳は先代と共に先の大乱でもこの地を守り抜いた知略と剛胆の人であったが、幸隆を歓迎し、鴇姫も引きあわせた。美しい鴇姫に幸隆の心が動かぬはずもなく、鴇姫もまた幸隆の異形を畏れる風もなく、短い逗留の間にふたりは心を通わせたものらしい。

幸隆が去った後、所在なげにため息をつく鴇姫を戌郎は何度も見た。

知徳は村衆を使い何やら探らせているようだったが、ただ姫に仕える戌郎には、それはあずかり知らぬことであった。

「戌郎」

鴇姫の涼やかな声が呼ばわる。

その声を聞き、その姿を見るたびに、悦びとほんの少しの悲しみが心を満たす。

戌郎の父もまた知徳の側近くに仕えた男であった。父に伴われ雨宮の館へ上がったのは戌郎が六歳の頃だ。

今でもよく覚えている……

あの時、幼い鴇姫は小さな犬の仔の骸を抱いて泣きじゃくっていた。

「姫様、何をそんなに泣きなさっておいでですか。目が溶けてしまいますぞ」
声をかけたのは父だ。
「アカの仔が死んでもうたのや……かわいそう……せっかく一緒に遊んだろうと思うとったのに」
「姫様」
と、戌郎を前に押し出しながら父が続ける。
「犬の仔ほどかわゆうもなし、役にも立たんかも知れませんが、これをその仔の代わりにおそばに置いては下さらんか」
「……」
鴇姫は泣きやみ、戌郎を見た。大きな黒い瞳に吸い込まれそうだ。
「おお。おまえの倅か」
と、泣きじゃくる鴇姫を持て余し、傍らでいささかしぶい顔をしていた知徳がいった。
「名は何という？」
戌郎の代わりに父が答えた。
「これに名前などあり申さん……なんとでも、お好きなようにお呼びくだされ」
「……いぬ……？その子……いぬの子なん……？」
かわいらしい声。姫の言葉に父は微笑んだ。
「そうです、姫様。これの名は戌郎。命懸けて尽くしますゆえ、可愛がってやってくだされ」
「……いぬろう……」
戌郎は頭を下げた。
「鴇、もう気が済んだやろう。その骸を戌郎に渡して弔うてもらえ」
「……」
鴇姫が黙って犬の仔を差し出した。それを受け取る。それはすでに固く冷たくなっていた。
ふたりはその場を離れ、屋敷の裏へと廻った。
「いぬろう」

と、姫が話しかける。
「なんでおまえはさっきからひとことも喋らんのや？もしかして喋られへんの？」
戌郎は頷いた。
鴇姫は一瞬驚いたように目を見張り戌郎を見たが、視線を外すと今度はほんの少し遠慮がちにまた訊ねた。
「……うちの声は、聴こえるんか……？」
戌郎はまた頷いた。
「……生まれつきなん……？」
「……」
しばらくしてから、また小さく頷く。
「かわいそうやな……」
ぽつりとつぶやいた声に、戌郎は思わず鴇姫を見た。その悲しげな表情に、我知らず笑顔を作りかぶりを振る。
そんな風に憐れまれたのは初めてのことだった。何か暖かいものに触れた気がした。

あの時からずっと、戌郎は影のように鴇姫につき従い、その身の全てを捧げて尽くしてきた。
それが戌郎の務めでもあったのだが、鴇姫が輿入れするならその任も終わるのだろうか……
「……」
鴇姫は今十六、いつ輿入れしてもおかしくない年齢ではあったが、これまで縁談の類もなく、わけもなくいつまでもこのまま暮らせるような気になっていたのだ。
任を解かれ鴇姫の許から下がるなど考えたこともなかった。
戌郎の望みは、ただ命の果てるまで鴇姫のそばに侍りこれに尽くす、そのことのみであった。

年が明けた。

鴇姫の天津幸隆への輿入れが正式に決まったのは春の終わりである。
この間天津家では先代が隠居し幸政が正式な当主となり、次男幸隆は外戚佐々家の名跡を継いで幸政の臣下となったが、姫の父である雨宮知徳は、実は天津の先代がすでにこの世にないことを知っていた。
「父上」
居室にあって何かを考え込んでいた知徳は、鴇姫の声に我に返った。
「なんや？」
「あの……」
鴇姫はほんの少し言いよどんだが、思い切ったように口を開いた。
「戌郎のことです、父上。戌郎は……あの、どうされるおつもりですか……？」
「戌郎か。あれはこれまでようやってくれた。おまえが無事片づいたら、あとは次郎の守りでもさせようかい」
次郎というのはまだ幼い鴇姫の異母弟、雨宮家の嫡男である。鴇姫は父の言葉を聞き、一瞬表情を曇らせた。
「父上……あの……我が侭を申し上げます……」
「うん？」
「戌郎を、連れて行ってはいけませぬか……？」
「口もきけん下郎を連れて輿入れか。供にするならわしがもうちょっと見栄えのええ者を選んだる」
「父上……わたくしは……戌郎がええのです……」
「おまえの強情にも困ったもんやの」
知徳は眉根を寄せ、吐き出すようにいった。
「こんな嫁を取る幸隆殿のご苦労が偲ばれるわ」
「……申し訳ありませぬ……」
幸隆の名を出され、鴇姫は消え入りそうな声で答えた。
「まあええ。戌郎のことは考えておく。おまえはもう下がりなさい」

鴇姫はまだ何かいいたそうだったが、そのまま一礼して去った。
「……」
しばらくの後、知徳は居室のまま呼ばわった。
「戌郎、おるか」
戌郎の姿はどこにもない。だが知徳は意に介するふうもなく続けた。
「鴇にはああいうたが、わしはハナからおまえを鴇につけたるつもりや。幸隆も承知するやろう」
「おまえももう知っとるやろう。天津の先代は毒殺や……天津幸政、やってくれるわ。
ちいと目論見が狂うたが、しょうがない……」
知徳は一息つくといった。
「戌郎、鴇を頼んだぞ」
軒下で戌郎は小さく頷いた。
鴇姫の「戌郎を連れて行きたい」「戌郎がいいのだ」という言葉を聞いたとき、心臓を鷲掴みにされたかと思った。
天津家には争乱の兆しがあり、そのただ中へ嫁いでいく鴇姫はまさに暗雲へと飛び行く一羽の小鳥である。
姫様は必ずわしがお守りする……
戌郎はあらためて心に固く誓った。戌郎は音もなくその場を離れた。
鴇姫は屋敷の裏、納屋の前で、所在なげに犬のアカとその仔犬達を相手にしていた。最初にアカが戌郎に気づき、鴇姫も振り返る。
「戌郎」

ひめさま……

戌郎も呼びかけた。だがもちろん、それは声にはならなかった。
「最初におまえに会うたとき、アカの仔を埋めてもろたんやったな」
もちろんそのアカとは今目の前にいるアカのことではない。だが

雨宮家では長年使役犬として犬を飼っており、それらは全て同じ血に連なる犬であった。
仔犬がじゃれつくままにさせながら鴇姫はいった。
「家を出たら、この仔らともお別れや」
ほんの少し、淋しげな表情。

ささの　おやしきへ
いっぴきつれて　いかれては

「そうやな」
戌郎の身振りを読み、鴇姫が笑った。
「さきに父上にいうたらまた叱られてしまうから、まずは幸隆様にお願いしてみよう」
「……」
「戌郎……」
なんでしょう？というように見やった戌郎に姫がいう。
「佐々家へは、おまえも一緒に来て貰いたいと思うてる」
ずきん、とまた心臓が締めつけられる。過ぎた悦びとは痛みと同義であることを戌郎は知った。
「幸隆様にお願いしてみるつもりや。幸隆様が応といわれたら、父上かてお許しくださるやろうからな」
「……」
戌郎は目を伏せた。幸隆様、と口の端に乗せるとき、鴇姫の頬はかがやき瞳は大きくうるんで、戌郎には目のくらむ思いであった。

3（前書き）

このパートは性的な描写を含みます。

3

「あの……ね」
黒髪村では林の中で籌が立ち止まり、口ごもるようにいった。
「うん？なんや？」
於仁丸も歩みを止め優しく問いかける。手は繋いだままだ。
木々を吹き抜ける風が気持ちいい。
森の小道にふたりの他人影はなく、木漏れ日が籌の艶やかな黒髪にきらきらと輝いている。
大きな瞳を縁取る長い睫が伏せられ、ふっくらとした小さな唇が動くのを於仁丸は見ていた。
おそらく籌にまさる女は都の上臈にもいまい。逡巡するさまも可愛らしい……と、思った。だがそれにしても、今日は会ったときから何やら籌の様子が変だ。さくら色の頬も心なしかこわばって見える。
「なんや、いうてみ？なんぞ心配事でもあるんか」
於仁丸はもう一度、優しく繰り返した。
「うち……、あの……」
目を伏せたまま籌は一度は口を開いたが、うつむいてまた押し黙ってしまった。
「どないしたんや……ええからいうてみ？なんかあったんか？心配事やったらわしがなんとでもしたるからいうてみい」
そういいながら両手を籌の頬に添え、顔を上げさせた於仁丸は息を呑んだ。
籌の睫に涙が溜まっている。やがてそれが頬を伝ってこぼれ落ちた。
「……籌……」
「うち……」
と、すすり上げながら籌が震える声でいった。
「からだが出来てきたから……お婆（ばば）さまが……そろそろ……あの…

…」
於仁丸は一瞬で全てを理解した。
籌はもともと閨房での毒殺を目的に育てられた少女だ。これまではまだ幼い体であったためもっぱら指技や口技を仕込まれてきたが、いよいよ体を開いて男を凋落する術を体得させようというのだ。
於仁丸は籌を抱きしめた。
己れすら見たことがない籌の裸体を、しわくちゃの婆がくだらない張形で嬲るのか……
わけのわからない怒りが胸を焼く。身から火が出るようだったが、それがこの村の在りようであり、お婆、ましてや腕の中で涙ぐんでいる籌が悪いはずもないことは於仁丸にもわかっていた。
於仁丸は必死に己れの心を抑えつけると
「大丈夫や……なんもこわいことなんかあらへん。お婆がうまいことやってくれる」
と、精一杯の落ちついた声音でようやくふりしぼるようにいった。
「ちがうの……」
「……え……？」
於仁丸の背中に廻された籌の腕に力がこもる。
「うち……道具なんかで破瓜されるのはいやや……それやったら、於仁丸に……してほしい……」
於仁丸は抱きしめた腕をゆるめると、再び籌の頬を取ってその顔を覗き込んだ。
頬が紅潮しているのは、先刻の告白のせいだろう。潤んだ瞳が黒曜石のようだ。
「この先に小屋がある……行こ」
うわずった声をまるで他人のそれのように感じながら、於仁丸は籌の手を取った。
ふたりは転がるように駈けだした。
森の奥の川縁の、その小さな掘っ立て小屋は漁をする際に使う村

人がいるらしく、人気はないが中は存外きれいに保たれていた。
茅を葺いた屋根は手入れが悪くところどころから光が漏れていたが、それもふたりには却って都合が良かった。
於仁丸は野良着を脱ぐと筵の上に敷き、そこへ篝を誘(いざな)った。
いつかは、と夢見ていたが、その日は来ぬかも知れぬとも思っていた。無理強いするつもりはなかったし、己れの毒をよく知る篝が自分を誘うとも考えにくかったからだ。於仁丸は背中に廻した腕で篝を支えながら、もう一方の手をそろそろと篝の襟元に差し入れた。
指先に吸いついてくるような肌理だ。
「あ……」
小さくため息が漏れた。
「ほんまは……ずっと、こうしたかった……」
体をすり寄せるようにすると、篝も応えた。
「うちも……」
於仁丸の指が小さく薄い篝の胸をためらいがちにまさぐる。
やがて微かな突起を捉えた。
「……っ」
篝がのけぞる。同時に指先から甘やかな痺れが全身を駆けめぐり、於仁丸も思わず息を呑んだ。
「ごめん……！きつかったか……？」
いつもは自信たっぷりなのに、些細な自分の反応にうろたえる於仁丸が愛おしい……
篝は笑おうとしたが、於仁丸の顔が涙でにじんだ。
「ごめんな。わしも初めてやから……加減がようわからん……」
「大丈夫……於仁丸の手、優しいて気持ちがいい……」
それは本当だった。幾条もの糸をまるで生き物のように操る於仁丸の指は力強くそれなのに繊細で、篝を思う気持ちがその指遣いから溢れてくるのがわかる。
小屋の中に甘い匂いが漂いはじめた。篝の上気した肌から発せられる体臭だ。

胸元に差し入れた手で籌の襟をくつろげ、於仁丸はそのちいさな白い肩に唇を這わせた。
「ああ……」
声が震える。
体で受け入れたことはないにせよ、この身はすでに男を知っている……
村の男に触れられたときは恐怖と嫌悪が先に立った。男とお婆の手管に体は熱くなったが、心は冷めたままだったし、恥ずかしさに消え入りそうだった。
それが……
ただ触れられ、口づけられただけで、こんなにも満たされた気持ちになるなんて……
だが一方で先刻図らずも「はじめて」と告白した於仁丸に対し、教え込まれた官能で応える我が身がひどく申し訳なく哀れにも思えて、籌は溢れそうになった涙を必死にこらえた。
於仁丸は籌がこれからされようとしていることを知っているが、まさかすでに他の男の指が籌を嬲ったとは思ってもいまい。於仁丸はこれまで籌に技を教え込んできたのはお婆のみだと思っているのだ。
決していうまい……そう籌は固く心に思った。
事情を知る於仁丸はきっとうちを許してくれる。でも心は傷つくに違いない。うちを大切に思ってくれていればいるほどに……
「帯……解いてもええか」
於仁丸のかすれた声に籌は我に返った。
「待って……自分で脱ぐから」
あわててそういったが、於仁丸は手早く籌の帯を解くと着物の前をくつろげてしまった。
「いややぁ……！」
半泣きで思わず襟をかき合わせようとする籌の両手を掴み、強引に下ろさせる。

真っ白な、やわらかく滑(すべ)らかな肌。幼い裸体に赤い腰巻きがなんとも艶めかしい。
ふたつの小さな桜色の突起が固く尖っている。どくん、と大きく己れの中心が脈打つのを於仁丸は感じた。
「きれいや、篝……恥ずかしがることなんかなんもなかろう」
そういうと篝を抱きしめ、耳元で囁いた。
「わしのもんや。そうやろ？……誇らしゅうてならん……」
「……うん……」
篝も於仁丸に廻した手におずおずと力を込めた。
「篝は於仁丸だけのものや……うちを、於仁丸のものにして……」

張りつめた腿に指をすべらせ、腰巻きの下に這わせる。
びくっと身を起こした篝がその手を掴んだ。
「……なんや？くすぐったかったか？」
からかうように笑った於仁丸だったが、篝の怯えたような表情に笑顔を消した。
「待って……うちに、触ったら」
「大丈夫や」
そのことか、と再び笑顔になる。於仁丸は諭すように優しく
「おまえの毒はわしには効かん。知っとるやろ？」といった。
「そやけど……」
「小さい頃からずっと一緒におるんやで。もう慣れとるのや。だいたい」
と、於仁丸は言葉を継いだ。
「おまえの毒にやられるんやったらとっくの昔に死んどるわ。口も何遍も吸うたやろ？」
そういわれて篝は頬を赤らめると恥ずかしげに身をよじった。於仁丸と絡めあった舌の感覚をまざまざと思い出したのだ。裸で抱き合っているのに口を吸った記憶に頬を赤らめる……そんな篝が、於仁丸には可愛くてたまらない。

籌の腕の力が抜けたのを感じ、於仁丸は再び指を這わせた。固く閉じられた腿の付け根に少しばかり強引に指を差し入れると、そこが熱く潤んでいるのがわかった。
「少し……力を抜いてくれ。これじゃおまえに触(さわ)れん……」
「ほんまに……大丈夫やろか……」
まだ心配している。
於仁丸は少しばかりいじわるな気持ちになり、籌の潤みをすくい取るとその眼前に突きだした。
「いや……っ！」
一瞬何を見せられたのかわからなかったようだったが、次の刹那籌は顔を背けると両手で覆ってしまった。
表情は見えないが、首筋から胸元まで朱を散らしたように染まっている。
於仁丸はといえば内心気もそぞろだったのが、恥ずかしがる籌の様子に少し落ちついてきた。
「きれいやないか……キラキラしとる」
もう一方の腕で籌を抱いたまま、指をかざして於仁丸はそういった。
それは本心だった。指にまとわりついた透明な潤みに、破れ屋根からの光が反射していた。
「もったいないから舐めてまおう」
その言葉にあわてて籌が振り返る。
「やめてそんな……！そんな……毒やのに……！」
思わずゆるんだ籌の腿にすかさず於仁丸が己れの腿を割り入れる。
「あ……っ」
向かい合う形になった於仁丸はにやっといたずらっぽく笑うと、やめさせようと掴んだ籌の指ごと、潤みに濡れた指を口に入れた。
「ああ……！」
於仁丸の形のいい唇がいやらしげに動き、白くきれいな歯並みから覗く舌が籌の指を舐め上げるさまに、籌は眼を反らすことができ

ずにいた。
「……吐き出して……そんな……汚い……」
だがその言葉に力はない。
「可愛い籌の身のうちから出たものやぞ？わしには何もかもが愛しい……汚いなんてことがあるかい」
一方の於仁丸は籌の様子を楽しむ余裕すら出てきた。
柔らかく熱い舌がちろちろと伸びては指の股まで丁寧に舐め取り、つつくごとに、籌の体の中心に甘い痺れが走る……
とろけるような籌に、於仁丸も再び切迫してきた。
抱きしめ、耳元で囁く。
「なあ……もう、……我慢でけん……
もう、ええか……？」
籌は快感に身を委ねていたが、於仁丸の切なげな甘い声に我に返った。
「ま……待って。ちょっと、待って……」
「こわがらんでええ。優しいするから……」
於仁丸はやはり破瓜の痛みがこわいのかと思ったのだが、そうではなかった。籌は先刻脱いだ着物の袂に手を入れると、何やら紙包みを取り出した。
それを於仁丸に手渡す。
「怒らんといて……ねえ」
於仁丸は頭の芯が冷えるのを感じた。包みを解かずとも、それが何かわかった。
「それ使って……うち……恥ずかしいけど、こっそり持ってきたの……」
於仁丸は包みを土間の隅に転がすと、にべもなくいった。
「いやや」
「於仁丸」
於仁丸の拗ねたような、傷ついた表情に心が痛む。
「自前の立派なもんがあるのに、なんで張形なんぞ使わなあかんの

や」
「ごめん、於仁丸。許して……そやけど……」
「おまえかてさっき張形なんぞで破瓜されるのはいややていうたやないか」
みなまでいわせず、たたみかける。その語尾はいささか厳しく、篝は怯えたように涙ぐんだ。
「……」
於仁丸はまた何かをいいかけたが、息を吸い込むと篝を抱きしめた。
「泣かんでええ。わしは怒っとりゃせん。篝……おまえはなんも心配せんでええのや」
「そやかて……」
と、嗚咽しながら篝がいった。
「お婆さまがいうとった……あそこは男の一番弱いところやて……そやから……いくら於仁丸でも……
うち……」
「心配すんなて。大丈夫や」
もう一度於仁丸がいった。幼な子をあやすような優しい声だ。
「さっきもいうたやろ。おまえの毒はわしには効かんのや。ずっと今まで一緒におるのが何よりの証拠や。わかるやろ？」
「……」
「小さいときのこと、覚えとるか？おまえが熱出して、わしが見舞ったときのことや。おまえはあのときもえらい心配しとったが、結局なんでもなかったやろが」
篝は於仁丸の右手にそっと己れの手を重ねた。
於仁丸のその掌には、今もうっすらと幾筋もの傷が残っている。
幼い日、毒にあたって寝込んだときに、心配した於仁丸がこっそり枕元に訪ねてくれたことがあった。そのとき吐いたものを於仁丸が始末してくれたのだ。口元の汚物を優しく拭ってくれた。
後日於仁丸の右手に包帯を見たときは肝が冷えたが、於仁丸は

それを解き、傷を見せてくれた。
　刃物で切ったような、幾筋もの鋭利な傷……於仁丸は
「おまえが心配で、糸で切ってもたのや。爺(じじ)いに気い抜くなてえろう怒られたわ」と笑っていた……
「……」
　籌は黙ったまま、やがて消え入りそうに小さくうなずいた。
「おまえは大事なわしの宝や。あんな張形にくれてやれるか」
　籌はまた小さくうなずいた。幼い頃の思い出、今於仁丸に隠していること……様々なことが胸に迫り、また涙が流れた。
「泣くな。なんも気に病まんでええ。せっかくこうしてふたりでおるのに……」
　そういいながら、於仁丸は籌の手を取り己れの陽物に導いた。
「あっ……」と顔を赤らめる籌に
「おまえが泣くから、さっきまで張り切っとったのがしょんぼりしてもたやないか」
　そういたずらっぽく笑いかける……と、思いもかけず籌の指がやんわりとそれを握ってきた。
「……ちょ……っ、籌……」
　やわやわと籌の細い指に揉みたてられ、瞬く間にそれは硬く張り切ってきた。
「さっきの、おかえし……」
　濡れた頬で、籌が微笑む。
　於仁丸も笑った。於仁丸は籌の頬の涙を舐めとるといった。
「そうや。おまえは笑っとるのが一番ええ」
己れの指技に切なげに眉を寄せ、吐息を漏らす於仁丸が愛しい……
　これまで張形を含まされ、掴まされても、嫌悪感と恐れしかなかった。
　男はなんと醜怪なものを身にぶらさげているのだろうと思っていたが、今手の中でびくびくと脈打っている熱いかたまりは愛しい於

仁丸の分身のようで、この上なく可愛らしく、大切なものに思えてくる。
「……於仁丸……好き……」
籌の艶を含んだ声に於仁丸は睫を上げた。
肌が上気し、輝いているのがわかる。籌が十分に潤んでいるのを確かめると於仁丸は籌の手を取りそっと外し、潤みへと押し当てた。
「ええか……？」
耳元で訊ねる。
熱い息が耳朶をくすぐり、かすれた甘い声と相まって、籌の官能を押し上げた。
「うん……」
と、素直に籌はうなずいた。
籌の細い腰を抱き、位置を確かめると強く打ちつける。
「……っ！」
声にならない悲鳴を飲み込み、籌の体が後ろへと逃げた。何度か試みたが、うまくいかない。
「籌」
「ご……ごめん……」
痛みに震える声で籌がいった。
「勝手に……体が……」
「あやまらんでええ……こわいんやろ？わかっとる」
動揺を押し隠し、優しく於仁丸が応えた。
こわくはない。はやくひとつになりたい。だが痛みに勝手に体が逃げてしまうのだ……
「ごめん……於仁丸……」
情けなさに涙ぐみながら籌は繰り返したが、於仁丸はその涙の意味を取り違えた。
己れの未熟な性技が恨めしい……
村の大人に何度か誘われたことがある。肉の愉しみとしてのみならず、男女の営みを知っておくのも技能のうち、といわれたが、そ

の度に篝の面影がちらついて誘いを遠ざけてきたのだ。
だがそれは間違っていたのかも知れぬ……
年かさの手慣れた男なら、相手が処女(おぼこ)であってもきっと上手くやれるのだろう。少なくとも愛しい女をこんなにも苦しめることはすまい。
篝の痛がりように、於仁丸は子供の頃、薬湯で右手を焼かれたときの痛みを思い出した。
先刻篝に話したあのとき、本当は篝の吐いたものに触れて爛れた掌を誤魔化すために、自らそこを傷つけたのだ。
それをお婆に見咎められた。お婆は利き手が腐り落ちたらどうするつもりじゃと於仁丸を叱責し、その手を毒消しの薬湯で洗ってくれたのだった。
あのときの焼け火箸で抉られたかのような痛み……だがそれは、今も残る傷と共に、幼いなりに篝の心を守ったという誇りの記憶でもあった。
わしは間違ってない……
改めて於仁丸は思った。
誰よりもわしが一番、篝を大事に思っている。手練れの大人なら篝を苦しめず、破瓜してやれるかも知れん。わしではきっと、もっと篝を泣かせてしまう。
だがそれでも、わしに抱かれる方が篝にも幸せなはずや。
篝ははじめての体をわしにくれるといった。それならわしも、はじめてを篝にやりたい……
於仁丸の思いを知ってか知らずか、篝が四肢を絡みつけてきた。
「うちは平気やから……お願い。早う……もう、逃げへんから……
於仁丸のものに、……早う……なりたいの……」
篝の健気さに胸が一杯になる。於仁丸は息をつめ、とうとう篝を貫いた。
「うあ……あっ……！」
耐えきれずに篝が呻いた。

まるで身をふたつに裂かれるような痛みに涙があふれる。
先刻可愛いとすら思ったものが、今は猛り狂って己れを引き裂こうとしている……篝の全身からはどっと脂汗が吹き出した。
「歯を食いしばったらあかん……！ゆっくり、息をして……」
「……っ」
息をしようにも肺すら痛みで詰まってしまったようだ。だが篝はなんとか息を吸い込み、浅く吐き出した。
薄い胸が大きく喘ぐ。於仁丸が篝の髪を撫で、汗で張りついた額のおくれ毛をかき上げてくれた。
「苦しいか、篝……」
そういう於仁丸の表情も苦しそうだ。
割り裂かれたばかりの篝の内はきつくきしんで痛いほどだった。
「もうちょっとだけ、こらえてくれ……すぐに終わる……」
腰の辺りの熱いものがふくれあがり、もう爆発しそうだ。ほんの少しでも動くと、そのたびに脳天に火花が散る。
それはとうてい快楽とは呼べない感覚だった。それでも、その感覚に捉えられ、もう逃れられない……
「もう、あかん……！」
「於仁丸……！」
篝が四肢に力を込め、汗に濡れそぼった体を押しつけてきた。
その刹那、於仁丸の中心で何かが爆ぜ、それが脳天へと突き抜けた。
「於仁丸……好き……！」
篝の声が、夢の中のように囁いた……

日はまだ高く、川面にきらきらと光が反射している。
先刻まで小屋で睦みあっていた於仁丸と篝は、今はきゃあきゃあと子供のようにはしゃぎながら裸で水遊びに興じていた。
汚してしまった於仁丸の野良着は篝によってきれいに洗われ、今は小屋の前に干してあった。

「わし、おまえを絶対離さんからな」
水の中で篝を抱きしめ、於仁丸がいうと、甘えたように篝も応えた。
「うん……ずっと、離さんといて……」
ふたりの間にはただ幸福だけがあった。

4

その日、黒髪村は村長（むらおさ）の屋敷では朝からちょっとした騒ぎであった。

鴇姫が突然お忍びで村へやって来るというのだ。

黒髪村は深い山あいにあり、案内がいなければ主の雨宮知徳すら訪ねることの覚束ぬ隠し里である。村長は何人かに命じ、麓まで秘かに姫を迎えに行かせた。

山道では姫を背にした馬を引きながら、戌郎はなんとはなしに浮き立つ気分でいた。

足元にはアカの仔犬が、やはりうれしそうに尻尾をぴんと立てて小走りでついてくる。

やがて一行は道をそれ、木々の中へと分け入った。馬が通れなくなるほどに木立が深くなってくると、戌郎は姫と背負子を下ろし馬を用心深く茂みに繋いだ。

姫を背負って立ち上がる。仔犬はその場に番として残した。

姫を傷つけぬよう、用心深く薮を漕ぐ。

「すまぬな……私の我が侭で、おまえにも迷惑をかけます」

背中で姫の声がする。とんでもない、というように戌郎は手を振った。

肩と背に感じる姫の重みと温み。ずっとこのままこうしていたい……、と戌郎は思った。木漏れ日の中、どこまでも姫を背負って歩き続ける、そんな幻想にふと捉われる。

山の小さな獣や川や滝を見ては無邪気に歓声を上げ、谷の深さにおののく姫がたまらなく可愛らしく、愛おしい。そんな姫のそばにいるのが今自分ひとりであることも、戌郎には幸せだった。

村衆が秘かに付き従っていることには気づいていた。この場はわしひとりで十分や、頼むから姿など現さないでくれよ

……そう願いながら歩を進める。
やがて木立もまばらになってきた頃、村衆が姿を見せていった。
「鴇姫様、お迎えにあがりました。かような辺鄙な所までようこそおいでくださいました」
「わざわざの出迎え、ありがたく思います。こたびは迷惑をかけるがよろしゅう頼みます」
背負子から下ろされた鴇姫は笑顔でそういうと、戌郎に対しても「ここまでありがとう……しんどかったやろ。ここからは歩いていくから大丈夫や」といった。
ほどなく村へ着いた鴇姫はまず村長の屋敷に入り、小半時ほどの後、戌郎を伴って野辺へ出た。
山村を訪ねるということで簡素ななりをしていたが、垢抜けた鴇姫はやはり目立つ。出会う村人はみな畏まって頭を下げ、鴇姫もこれにいちいち声をかけていたが、やがて目当ての人物を見つけた。
篝だ。
篝はいつもの如く於仁丸と一緒だった。
「鴇姫様……！？」
鴇姫の姿を見つけた篝がかしづく。慌てて於仁丸もこれに倣った。
「畏まらずともよい。ふたりとも顔を上げておくれ」
鴇姫はひとの心を捉えずにはいない笑顔でそういうと
「そなたが篝か。お婆にそなたが薬草に詳しいと聞いて訪ねてきました。実は集めたいものがあるのや。手伝うてくれるね」と続けた。
「光栄でございます、鴇様……うちに出来ることでしたら、なんなりと」
頬を染め、篝が懸命に答える。
その様子は鴇姫のみならず、戌郎が見ても微笑ましく可愛らしいものだった。
ふと視線をずらすと、戌郎に対し、於仁丸がこっそりとだがしきりに何やら目配せを送っているのが目に入った。
「……」

戌郎は姫様、というように空気のようなささやかさで鴇姫の袖に触れた。
敏感にそれに気づき、鴇姫が戌郎を振り返る。

すみません……
ようじを　おもいだして

「……」
鴇姫が口を開く前に、於仁丸がいった。
「しょうがない奴っちゃな。わしが代わりに鴇様をお守りするから、ちゃっちゃと済ませて来たらどないや」
一瞬、籌が呆れたように於仁丸を見、それから自分に向かって申し訳なさそうな視線を投げたのを戌郎は見逃さなかった。
くすり、と鴇姫は笑うと
「おまえも久方ぶりの生まれ在所や、色々行きたいところもあるやろうし、会いたいひともおるやろう。村の中のこととて心配はいりません。用事が終わったらこの者たちに案内してもらうから、ゆっくりしておいで……」
といい、於仁丸に振り返って
「そなたの名はなんというのですか？」と訊ねた。
於仁丸は主家の姫である鴇姫を見知っていたが、鴇姫は当然於仁丸とは初対面だ。
「於仁丸と申します、鴇様」
「於仁丸。それから籌。今日はよろしゅうな」
鴇姫は笑顔でふたりの名を繰り返した。

山あいの下草に薬草を探している間、於仁丸と籌がこっそり手を握りあったりふとしたことで目を見合わせて小さく笑ったりしているのを、鴇姫は微笑ましい気持ちで見ていた。
「鴇様、今日のうちにお屋敷にお戻りですか？」

於仁丸に訊ねられ、そうだと答える。
「ここはええ村や……のんびりしていきたいが、そういう訳にもいきません」
と、鴇姫は笑った。
「それやったら早めに長さまのところまでお送りした方がよろしゅうございますね」
篝が応えた端から
「戌郎がついとるんやから夜道でも大丈夫やろ」
と、冗談半分に於仁丸がいいかけた。あわててたしなめるように篝がいう。
「大丈夫でも暗うなったら道中鴇様が怖い思いをされるやないか」
「いや、於仁丸のいう通りや。戌郎がおれば日暮れた山道もわたくしは平気です」
そういいながら、鴇姫は笑顔で続けた。
「そやけど遅うなったら戌郎が父に叱られましょう……すまぬが日暮れまでには間に合うように、わたくしを送っておくれ」
「……なるべくたくさん、急いで探しましょう」
篝も笑顔で応えた。
日が中天を過ぎ影が伸び始めた頃、三人は村長の屋敷へ戻った。
時間を読んでいたのか戌郎はすでに待機しており、鴇姫はその場の者に礼をいうと、戌郎と数人の村衆と共に去っていった。
屋敷からの道すがら、篝がうっとりとした様子でいった。
「鴇様、おきれいやったなあ……それにほんまにお優しそうで……」
確かに、と於仁丸は思った。戌郎の気持ちも少しわかる気がした。
だが、それでも……
「もうすぐお輿入れやそうやな。それであんなにおきれいなんかな」
「……」
素早く周囲を伺い誰もいないことを確認すると、於仁丸は篝の耳元に顔を寄せ、小さくいった。
「内緒やぞ」

何ごとかを囁かれ、みるみる籌の頬が赤く染まった。
つないだ手に力がこもる。
今は於仁丸は素知らぬ顔をしていたが、籌は先刻の於仁丸の言葉を何度も胸の内で繰り返していた。
――おまえの方が、ずっときれいや――

山中では戌郎が鴇姫を背負い、帰路を辿っていた。
先刻まで村人の先導があり、往路よりはずいぶんと早い道のりだったが、今は姫とふたりきりだ。
「戌郎」
鴇姫が呼びかける。
「今日は楽しかった……お願いも聞いてもらえたし、薬草もたくさん集めることができました」
戌朗は微笑んだ。それはようございました、と心のうちで応える。
「おまえをはじめ皆に迷惑をかけたが、一度おまえの村にも行ってみたかったのです」
ひとりごとのように鴇姫が続けた。
「……嫁いだらもう、この国には帰って来れんやろうしな……」
「……」
ふと、鴇姫の声にしんみりしたものを感じ、戌郎の心にもかすかなさざ波が立つ。
「なあ、戌郎」
先刻とは違う、明るい声で再び鴇姫がいった。
「あの籌と於仁丸は好きおうてるのか……？」
多分、と振り返り、背後の鴇姫を見やる。
以前からふたりが好きあっていることを戌郎は知っていた。元々美しい娘だと思っていたが、今日の籌が格別に輝いて見えたのは気のせいか……
「かわいらしい子やったなあ。あの年であれだけ薬草に詳しいのはたいしたもんや……

わたくしはこの年になるまで何も知らんではずかしい……」
「於仁丸というのも女(おなご)みたいなきれいな顔立ちやったな……ほんまにお似合いのふたりや。
年はおまえよりも三つ四つ若う見えたが、おまえが安心してわたくしを託す相手や、きっと手練れなんやろうな……」
「……」
戌郎は、それには答えなかった。
戌郎自身もそうだが、於仁丸に戦の経験はない。黒髪村が戦場になることはなかったし、ふたりがそれなりに成長した時には、曲がりなりにも領内は平和であった。
しかし戌郎は、幼馴染みであることを別にしても、同じ年頃の者の中では特に於仁丸を買っていた。
時に傲慢不遜な於仁丸だが、その悪目立ちする言動とは別に、技に於いては真摯な努力を重ねていることを知っていたからだ。
それは籌という、具体的な守るべき者を持っているがゆえだろうと思っていた。
「おまえが連れてきてくれたおかげで、今まで見たこともないようなかわいい獣や立派な滝も見れた……
ほんまに、ありがと……」
鴇姫の言葉を聞き、切なさに胸がまた痛くなる。
……わしに礼など述べんでください……
……わしは……
ぐ……っ、と背負子が重くなった。
眠られたか……と、戌郎は思った。
鴇姫を起こさぬよう、闇をまとい始めた木々を縫い戌郎はゆっくりと歩いた。

5（前書き）

このパートは性的な描写を含みます。

5

黒髪村は、普段は他の村々と同じく狩りをしたり田畑を耕して暮らしている。

この夏はどうにか好天に恵まれた。勢い良く生長するのは作物のみに限らず、村人は雑草刈りや潅水など田畑の世話に明け暮れている。

於仁丸もまた農作業に駆り出され汗を流していたが、ふと目の端に篝を認めこっそりとその場を抜け出した。

「篝」

「於仁丸……なんでこんなとこに」

作物の世話は良いのか？と訊ねる篝に、於仁丸は

「ええのや。わしがやらんでも他の者がやりよるわ」

と、こともなげに言い捨てた。

「それよりおまえはどないしたんや？」

「うちは……お婆様のいいつけで、弥助やんのとこに膏薬と薬草を届けた帰りや」

弥助というのは生まれながらに背虫のいざりだが、細工物が得意で、戦で四肢を失った者のための道具なども手がける男であった。

「……」

「この頃体がきついそうや……何やら根を詰めとるようやし、うちらには思いもでけんしんどさがあるのやろな」

於仁丸は憂いを含んだ長い睫を伏せがちにそういう篝を見ていたが、ほんの少しの沈黙の後に口を開いた。

「この後まだ用事はあるんか？もし、なかったら……」

そういいながら篝の手を取る。

「……於仁丸……」

篝は於仁丸の意図を察し、頬を染めた。

「……なあ……痛いことは、せえへんから」

懇願するような、心許なげな於仁丸の表情が愛おしい。頬を真っ赤に染めて視線を合わせないようにしながら、籌は
「……お婆様は今日は長様のところにご用やというとったから……多分、夕方までに帰れば大丈夫やと思うけど……」
と、消え入りそうな声で答えた。

以前、川縁のこの小屋で睦みあった時は無我夢中だった。
正直なところ確かな記憶は、籌を得てただ幸せだったことと、それとは別に籌がつらそうで心が痛んだことだけだ。
あれは夢だったのはないかと思ったこともある。だが今、再び籌の肌に触れると、あの時の熱や吸いつくような手触り、吐息の甘さも切ない声も、全てがくっきりと脳裏に蘇ってきた。
瞬く間に切迫してくる己れの一物が我ながら滑稽だ。
正直なもんや……と、於仁丸は呆れながら思った。だが恥じる気持ちはない。
それだけ籌を愛し、欲している証だと思った。
「あの後、お婆にはなんかいわれなんだか？」
「……大丈夫や。うちも気をつけてるから……」
「……」
ほんの少し、苦い思いが脳裏をかすめる。
「……お婆にはそのうち、わしからちゃんと話すから……」
「うん……」
籌が甘えるように応える。
於仁丸はこらえきれなくなり、籌を強く抱きしめた。
「なあ……ここ、使ってええか……？」
そういいながら、籌の閉じられたなめらかな腿に触れる。
「え……」
籌は一瞬於仁丸のいうことが飲み込めなかった様子だったが、すぐに察して目を伏せた。
しばらく恥ずかしそうにしていたが、上目遣いでいたずらっぽく

笑うと小さな声でいった。
「……待って……今日は、うちが……したげる……」
籌の瞳がきらりと光る。
「え……、ちょっ……」
やんわりと掌に包んだそれに唇を寄せる籌に、於仁丸はうろたえた。
「やめとけ籌、そんなこと……あかん……！」
「うちのものならなんでも愛しいていうてくれたやろ……
うちも一緒や……於仁丸に、したりたいんや……」
愛らしい唇が於仁丸のものを呑み込む。
柔らかく濡れた熱い舌が敏感な部分にからみつき、於仁丸は思わず
「あ……っ……！」と小さく呻いた。
ただでさえ昂ぶりきっているのに、大事な籌が自分のものを……と思うだけで頭の芯に火花が散る。
「あかんて籌……！……いってしまうやろ……！」
だがその言葉尻はかすかに震え、引き離そうと籌の頭を掴んだ腕にも力はない。
それどころか、無意識にか於仁丸はその腕を押しつけてきた。
「……っ」
猛ったものを喉に深く押し入れられ、息が詰まる。
だが籌は耐えた。於仁丸には到底いえる訳もないがいつもさせられていることだったし、何よりも相手が於仁丸なら、それも悦びと感じられたからだ。
籌はこっそりと於仁丸の表情を盗み見た。
眉根を寄せて目を閉じ、唇を噛みしめている。切迫した呼吸、長い睫が揺れ、泣いているようにも見えるその表情を見ることが出来るのは、きっと自分だけだ……
びくん、と喉の奥の塊が痙攣する。そして熱いものが吐き出されてきた。
籌はそれをそのまま飲み下した。

「か……篝……」
ほんの刹那の放心から覚めた於仁丸が、うろたえた声でいった。
「飲んでもたのか……なんてことを――」
篝は口元を抑えたまま答えなかった。まだ少し喉にいがらっぽさが残っていた。
「……っ！」
突然肩を抱き寄せられ、手を掴まれて口を吸われた。於仁丸の舌が強引に歯列を割って入ってくる。
「……あ……っ、な……何を……」
思わず顔を背けようとしたが於仁丸の力は存外強く、篝の唇は再び塞がれた。
口中のかすかな残滓さえ舐め取ろうとするかのような於仁丸の舌と抱きしめられた腕の力に、篝の頭がぼうっと霞む。
口を吸い舌を絡ませあいながら、それぞれの手で互いの体をもまさぐりあうことに、いつしかふたりは夢中になっていた。

「不思議やなあ……こんなんで人の首も落とせるのか」
指に嵌めた指貫のようなものから引き出した一条の糸を見ながら、篝がつぶやくようにいった。
その指貫は於仁丸のものだ。於仁丸は糸術の遣い手であり、その得物は今まさに篝がもてあそんでいる、指貫に巻き取られたつよくしなやかな黒い糸――夜条であった。
篝は座ったまま於仁丸にもたれかかり、於仁丸はその篝を後ろから支えている。於仁丸はその背に上衣を羽織っていたが、篝は素肌のままだ。
つ……、と篝は糸をしごくように指を滑らせた。もちろん指が切れたりはしない。糸はただなめらかだった。
於仁丸は少し笑うと篝の指から指貫を抜き取った。
「誰にでも使えるんやったら、却ってあぶのうてしょうがないわ」
そういいながら、己れの指に嵌め、ひゅっと腕を振る。

戸口近くに置いてあった棒きれが、ぱしん！とふたつに割れた。
「……これ、髪の毛で作ってるんやろ？」
籌が訊ねる。
「女（おなご）の髪や。女は情も業も深いからやてお爺がいうとった」
「……業……」
於仁丸は屈託なく笑うと
「わしにはわからんわ」といった。
「……」
籌は己れの髪をひと房手に取った。
先刻於仁丸が丁寧に梳き上げたその髪は艶やかで美しい光を滲ませ、手触りもうっとりするほどなめらかだ。
幼い頃からふたりでいる時、於仁丸はよく籌の髪を梳いてやったものだった。於仁丸は髪の扱いに慣れていて丁寧だったし、梳き櫛もよく使い込まれて滑らかな歯を持っていたから、肌を交わすまではそれがこの上なく心地よい愛撫だったのだ。
微かに髪油の甘い匂いがする。それは櫛に染みこんだもののようであった。
他の村人同様、素破の習いで於仁丸もまた匂いには敏感だったからほとんど体臭というものを持たなかったが、ごくまれに頬を近づけたときなどほのかに甘い髪の匂いを感じることがあった。
今、自分が於仁丸と同じ匂いをまとっている……そんなささやかなことが籌には嬉しかった。
「……うちももっと髪を伸ばそう……そんでうちの髪を、於仁丸にあげる」
「やめとけ、禿げるで」
於仁丸は冗談のように答えた。だが籌は本気なようだ。
「うちが於仁丸を守ったげる。うちの身代わりがいつも於仁丸の側におれたら、幸せやんか……」
「……」
籌の身代わりに、いつも側に――

於仁丸はその考えにふと囚われたが、すぐに思い直した。
「やっぱりあかん。簪の髪で綯ったりしたら、もったいのうて使えんわ」
「髪なんかすぐ伸びるんやから、のうなったらなんぼでもまたあげるやんか」
不満げにかすかに唇を尖らせた簪が振り返る。於仁丸はその唇についばむように軽く口づけた。
それから簪の髪を一本ぷつんと抜き取って己れの小指に巻きつけると、笑っていった。
「これでええやろ。ずっと一緒や」
「……於仁丸……」
於仁丸は羽織っていた上衣の袖に腕を通した。
「そろそろ行こ。あんまり雲隠れしとるのもまずいやろ」
簪も笑うと腰巻きに手を伸ばした。

夏のこととて日はまだ高かったが、簪がお婆の屋敷に帰ったのはもう七ツ（4時）を過ぎた頃であった。
お婆はすでに戻っており、簪を見とがめていった。
「なんや、今頃戻ったのか……弥助のところでなんぞあったのか？」
「いえ……すみません、遅うなりました……」
簪はそれだけいうと顔を伏せ、足早にその場を立ち去った。すれ違いざま、ほんの微かな甘い匂いがお婆の鼻をくすぐる。
「……」
それが髪油の匂いだということはすぐにわかった。
於仁丸とおったのか……
お婆はいささか複雑な思いで簪の後ろ姿を見送った。
この頃の簪は傍目にもわかるほど、めっきりと美しく艶めかしくなった。簪に夜伽を仕込んでいる男衆も、それを口にしている。肌の艶も体の反応も声までも、何もかもが以前とは違うと……
於仁丸と、なんぞあったかも知れん……

己れの毒を知る籌が自ら身を委ねるとは到底思えなかったが、お婆は於仁丸の思いや性分をよく承知していたから、あれは無理強いしてでも籌を我がものにしたかも知れん、と思った。
村の者はみな、籌に触れられる者は誰もおらぬと思っていたが、ひとりお婆だけは違った考えであったのだ。
せんないことやの……
お婆はため息をつくと襖を開け、居室へと消えた。

6

於仁丸が村長の屋敷に呼ばれたのは夏も終わりの頃である。
あらかじめお爺から話は聞いていた。雨宮の屋敷まで品物を届けるようにとのことであった。
「それは一向に構わしませんが……なんでわしに……？」
「そのことよ」
と、長は少しばかり憮然とした面持ちでいった。
「おまえではいささか不調法やとわしも思うのやが、鴇様が特におまえをと仰るのでな。しょうがない」
「……鴇様が……」
「気をつけて、決して粗相のないようにせいよ」
長の言葉は、於仁丸の幼さや不遜な態度を不安に思っていることがあからさまであった。
いわれて件の品を受け取りに弥助の小屋まで出向いた於仁丸は、道中で篝に会った。いぶかしがる篝に、屋敷へ出向くことになったと手短に話す。
「明日、夜明け前に出る。行って届けるだけやから、夕方には戻って来れるやろ」
「気をつけてな……」
篝の心配そうな様子に於仁丸は笑った。
「大丈夫や。屁でもないわ」
「……」
「そうや」
と、何か思いついたように声を上げたが、
「何？」と聞かれて言葉を濁した。
「いや……なんでもない」
「もう行け。はよう帰らな、またお婆に叱られるぞ」
於仁丸の冗談めかした物言いに篝も笑った。

夕暮れのけだるく物憂い風が体をすり抜けていく。
茜雲が一面を染めている。
朱に染まった野の道で、振り返り手を振る籌の姿。
その身もまた夕陽に輝き、この世のものとは思えぬ美しさが、手を振り返した於仁丸の心を切なく締めつけた。

翌日。
「……で、この骨の継手がばねになってまして……立ったり歩いたりがラクなように手助けしてくれるという次第で……」
雨宮の屋敷である。
そこには幸隆と鴇姫がおり、於仁丸が拙い舌で説明しているのは、今朝持参した品についてであった。
濡れ縁に腰掛けた幸隆の袴をたくし上げた右足には、見慣れぬ装具が巻きつけてある。それは右足――すなわち不具な足を両側から支える、ちょうど膝の部分で継がれた二本の支柱と、その支柱をしっかりと固定しておく幅広の帯からなっていた。
「あとは草履裏に足(た)りん高さを補えば、だいぶ歩き易うなるやろというとりました」
「うむ、これはなかなか具合が良い……」
幸隆がまんざらでもない様子でいい、鴇姫もほっとした表情を見せた。
「村の者はみんな器用でようしてくれます。先に差し上げた薬草も、ここにおる於仁丸と村の娘が探してくれたものです」
「ああ、あの薬湯か……有難く頂戴しています。えらい苦いのだけは困りもんやが」
そういって幸隆は笑った。
「それにしてもようこんな仕掛けを考えつくものやな……それに細工も丁寧な細かいものや」
「この者の村は人里離れた山村ゆえ……戌郎もそうやが血が濃ゆうなって、不具に生まれる者も少のうないそうで、こうした工夫もよ

うされてると聞いてます」
と、鴇姫がいった。
「なるほど……道理で鴇殿は、わしのような異形も怖がらんとつきおうてくだされた訳やな」
「そんな……幸隆様はお優しいお目をしておられます……」
「これを作った弥助もいざりです。ほんまは弥助が来れたら良かったんやが、あれに山越えはムリなので……」
聞いちゃおれん、とばかりに割って入った於仁丸に幸隆がいった。
「それでは今度、わしの方から出向こうか？」
「いえ」
と、於仁丸はそっけなく答えた。
「失礼ながら、そのおみ足ではムリや」
そういってから、何ごとか思いだしたようにあわてて付け加える。
「村へは道もありませんから、山中を手探りで歩かなならん。必ず迷います……そやから里の者は誰もわしらの村へは来れんのです」
幸隆は気分を害した風もなく、笑って
「そうか。それは残念なことやな」
と答え、鴇姫に向かって
「鴇殿はこの者の村へは行ったことがおありですか？」と訊ねた。
「いえ……」
と、鴇姫も答えを濁した。
黒髪村衆は父、雨宮知徳の隠し刀のようなもの……たとえ相手が夫となる幸隆であっても、あまりあけすけに語るのは憚られた。
「これも先ほど申しました通り、村はたいそう険しい山の奥深くにあると聞いてます。訪ねるには困難な場所かと……」
「そうですか」
幸隆は深くは追求せず、あっさりと話を終えた。
さりげなく於仁丸を一瞥する。
於仁丸はまっすぐな、不躾ともいえる視線を幸隆に向けていた。
この男、戌郎の同朋の百姓とのことだが、雰囲気は随分違う……

戌郎は長らく姫に下男として仕えていたからか、もの柔らかな雰囲気を身につけていたし、目上の者とは視線を合わせようとしない男であった。ことに幸隆と接するときは努めて感情を面に表さず、腹の底を見せない――

だがこの、若い男ときたら――

「わしの顔がさほどに珍しいかな」

やんわりと無礼を指摘され

「いえ」

と、於仁丸はあわてて目を伏せた。

戌郎がやって来て知徳が幸隆を呼んでいる、と告げた。

幸隆は鴇姫が戌郎の手振りを読むのを不思議な面持ちで見ていた。

「わたくしも簡単な手振りしかわかりませんが、それで戌郎と話ができます。幸隆様も一緒に暮らせば、きっとすぐにわかるようになります」

そういった時の鴇姫の笑顔は晴ればれと美しかった。

ふたりは奥へと消え、戌郎と於仁丸が残った。

戌郎は相手が黒髪村の者であれば、鴇姫に対する何倍もの情報を語ることができる。

否、黒髪村衆であればそれ以外の人間の何倍もの情報を、戌郎の手話から読み取ることができるのである。

しかし今、ふたりの黒髪村の人間に、細かく交換し合わなければならない情報など何もなかった。

「さっきの話……」

と、先に口を切ったのは於仁丸だ。

「おまえ、鴇様についてゆくのか？」

戌郎はうなずいた。

「……そうか。ほんならこれが、おまえとの今生の別れかも知れんのやな……」

多分、そうはなるまい……と戌郎は思ったが、これは黙っていた。

天津家の内紛は、於仁丸にはさしあたって関係のないことだ。
「婚礼はいつやった？もうそろそろやと聞いた気がするが」
明後日や……と戌郎が答える。
「……それは……」
と、於仁丸がいい止した。
屋敷中が大騒ぎや、そやけど間におうて良かった、と戌郎は笑った。

くちには　ださんかったが
ひめさまも　さぞかし
きを　もまれた　ことやろう

「輿入れか……とうとう、鴇様が……」
つぶやくように於仁丸はそういったあと、
「それにしても天津幸隆という男」
と、話題を変えた。
「初めて会うたがどうも食えん男やな……鴇様には悪いが、わしは好かん……」
戌郎は笑った。たしかに於仁丸と幸隆では、あまり仲良くはできそうにない。
いずれにもある種の才気走った部分があり、それが互いに鼻につくのだろうと思った。
だが於仁丸はいざ知らず幸隆はその爪を用心深く隠していた。

ゆきたかさまは　いまは　もう
あのつの　にんげんや　ない
ささけの　あととりや

「そうやったな……そら冷や飯食いの次男坊では、嫁など娶ることはでけんわなあ」

於仁丸は気のない声で答えた。それから声をひそめていった。
「お館さまも何を考えてなさるのやろうな……鴇様とおまえをくれてやるくらいや、あの幸隆を高う買うてなさるのやろうが……」
ふたりの会話はやって来た侍女によって遮られた。
「於仁丸とやら、姫様がお呼びです」
「……はい」
いささか怪訝な面持ちで於仁丸は立ち上がった。

「こたびはご苦労様でした」
座敷で鴇姫に労われ、於仁丸は頭を下げた。
幸隆のことは好かずとも鴇姫には好意を抱いていたから、その言葉は素直に嬉しかった。
「おまえにわざわざ来てもろうたのは、先日のお礼もいいたかったからや。あの時はほんまにお世話になりました」
「いえ……わしらはなんも……お言葉、もったいのうございます」
於仁丸はいつになく神妙だ。鴇姫は笑顔のまま続けた。
「薬草も今日の品も、幸隆様はたいそう喜んでくだされた。たいしたことはしてやれんが、わたくしにできることならなんでもいうておくれ」
「いえ……」と於仁丸はいいかけたが、ほんの少しの逡巡の後に言葉を継いだ。
「鴇様それでは……この後少しだけ、わしにつきおうてくれませんか？」
「つきあう……？」
「せっかく山の中から町へ出てきたのや……何か籌に求めてやりたいが、わしでは女の喜びそうなものはわかりません……そやから……」
頬を染めてそういう於仁丸は初々しく、元々美しい見目もあり、先刻不躾に幸隆をねめつけた者とは別人のようである。
「……わかりました」

鴇姫は少し待っていておくれ、といって立ち上がると奥へと消えた。
しばらくの後戻った鴇姫の手には包みがあり、鴇姫はそれを於仁丸の前で解いた。
於仁丸は息を呑んだ。目の前には美しい反物があった。
緋色から薄桃にぼかした地に、花びらのように大小の絞りが散らされた絞り染めである。その絞りにも差し色が施された、非常に手の込んだものだ。
普段草や泥で染めたようなものしか目にしたことのない於仁丸が、初めて見る豪奢な品であった。
「わたくしがまだ幼かった頃に、父上が都で買うてきてくだされたものや。お気に入りの晴れ着やったからよう着てあちこち痛んどるが、大事にとっておいたのです。
ちゃんと洗いはりもしてある。仕立て直せばまだまだ着られます。籌に持っていっておやり」
「ええのですか、鴇様……こんな、大事なもんを……」
我知らず声が上ずった。
鴇姫は微笑むと
「ええのや」といった。
「籌にはわたくしも何かしてやりたいと思うておりました。あれはほんまにきれいな子や……この着物もきっとよう似合うやろ」
「ありがとうございます……！」
畳にこすりつけんばかりに頭を下げたのも、常の於仁丸にはないことであった。

7（前書き）

このパートには残酷・性的な表現が含まれます。

7

於仁丸が雨宮家を辞した頃、篝は必死で山中を駈けていた。
追っ手はふたりの侍である。このふたりは素破の心得があるらしく、木々の小枝や悪い足場をものともせず、時に樹上を跳ぶ篝を見失うことなく追いすがってきた。
今朝目覚めたときは、今日がこんな日になるとは思いもしていなかった。
屋敷へ出向いた於仁丸を迎えに行こうかと考えたのも、ほんの思いつきだ。
昼過ぎにこっそりと村を出た。大きな滝が山の中腹にあり、村に戻るにはこの前を必ず通る。
その辺りで待っていようと考えたのだが、これまであまり村から出たことがなかったのが篝の不幸であった。
どうやら道を違えたらしい……さんざん迷った挙げ句細い山道へ出た篝は少し焦っていて、近づく者に気づいたときは、相手にもすでに見咎められていた。
「何者や？そこで何をしておる！」
馬上に三人の侍である。ひとりの主とふたりの従者と見て取れた。狩りにでも来たらしく、いずれも射籠手をつけ、弓を携えていた。
「この山奥に女がひとりで何の用や」
「近隣に住む百姓です……あの、山菜を採りに参って……道に迷うてしもうたのです……」
「近隣？どこの村や、いうてみよ」
篝は答えに詰まった。何故だか黒髪村の名を口にしてはいけない気がした。
「ふうむ……」
侍達が篝を睨めつけた。
まだ幼いが、百姓とはとうてい思えぬ垢抜けた美しさである。身

につけたものも粗末ではあったがすっきりと清潔で、垢じみたところがまるでない。
それがこのような山中にぽつんとひとりでいることが、ますますもって奇異であった。
侍達の、着物を剥いで舐め上げるような不快な視線に篝が耐えきれなくなった頃、主(あるじ)らしき若い侍がいった。
「いえんのか。おまえは山菜を採りに来たというたが、見たところ籠も鎌も持っておらんようやな」
ふたりが下馬し、篝に近づいて来た。
「……」
嫌な汗が脇を伝った。四肢が緊張し、神経が研ぎ澄まされて来るのがわかる。
「あやしい女や、捕らえよ!」
ふたりが手を伸ばすのと、篝が飛びすさり木立の中へ逃げ込むのがほぼ同時であった。

それからずっと追われている。
水の音がしていたが、篝の耳に入るのは己れの激しい息づかいのみであった。
侍が矢をつがえ、撃った。いくつかはかわし、いくつかは木々にはね返された。だがとうとう一矢が篝のふくらはぎを射抜いた。
「あっ……!」
膝が折れ、つんのめる。そこは小さな崖になっていて、篝はすぐ下へと落ちた。
水かさのある時には川底になっているはずの、荒々しい石が転がったわずかな河原である。
「ようも逃げ回ってくれたな……女童(めわっぱ)めが、我らから逃げおおせられると思うたか」
ひとりが残忍に笑いながら近寄って来た。主を呼びに戻りでもしたものか、もうひとりの姿はなかった。

「うちはただ……恐ろしゅうて……逃げた……だけです……なんで……」
痛みと苦しい呼吸(いき)で、言葉もろくに出て来ない。
「ぬかせ、先ほどの身のこなしといい、きさまただの百姓ではなかろうが」
あの時大人しく捕らえらておけば良かったのか……だが篝には、そうしたところでかかる結果にさほどの違いがあったとも思えなかった。形勢は絶対的に最悪であり、この場を切り抜けようとするなら奇跡を待つ以外にはないこともわかっている。
……於仁丸……！
溢れそうになる涙をこらえ、篝は唇を噛みしめた。それから隙を見、袂に隠し持った棒手裏剣を撃った。
抵抗してもしなくても、どのみち命運は決まっているのだ。
「うおっ！」
不意を突かれ、侍はのけぞった。
だがわずかに切っ先がそれた。手裏剣が篝の手を離れる間際、飛んできた矢がその手を射たからだ。
右手を砕かれ、弾かれたように篝はまた倒れた。
「たかが女童ひとりを相手に、何を手こずっておるのや」
「こやつ……！」
あわや手裏剣を突き立てられるところであった侍は憎々しげにそう吐き捨てると、自ら弓を取って篝のもう一方の腕を射た。
「うあ……っ」
うめき声が上がる。侍は倒れた篝に近づくと、間近から両膝にも矢を射込んだ。
噛みしめた唇から悲鳴が漏れた。
「うぬ、何者や」
近づいて来た若侍がいった。
「答えい。どこぞかの刺客か、それとも山に住む狐狸か妖(あやかし)か……」
「……」

篝は答えない。
どうやら暗殺をおそれている身分のある侍らしかったが、これが何者であっても、篝にはすでに意味のないことであった。
「よい。うぬの体に聞いてやるわ。これから、じっくりとな」
若侍は笑みに残酷な愉悦を浮かべていった。
「美しい娘が血みどろで泣き叫び命乞いをするのは、さぞかし堪えられぬ眺めであろうよ」

河原では今まさに、酸鼻な光景が繰り広げられようとしていた。
手足を射抜かれて倒れている美しい少女を、狩り装束の侍が三人、薄笑いを浮かべて見下ろしている。
侍が刀を抜いた。
「まずはその手足、切り落としてくれる……先のようなふざけた真似がでけんようにな」
まず右腕を切り飛ばす。
少女の体は跳ね上がり、胸が大きく喘ぐ。苦しげに呻いたが、悲鳴はあげなかった。
侍は血に濡れた刀先を少女の鼻先に突きつけた。
「どうや、痛かろう。命乞いはせんのか？」
少女は顔を背けた。その表情はきつく歪んでいる。美貌が凄惨さに拍車をかけていた。
侍は次に左腕を、そして右足、左足と切り飛ばしたが、顔を見合わせて不満げな、面妖な表情をした。期待していた血を吐くような絶叫が、ついに上がらなかったからだ。
足元に転がった、今は手も足もない芋虫のごとき姿へとなり果てた少女、篝は痛みに喘ぎ、身をよじっていた。
血と涙と脂汗にまみれた美貌とそれに不釣り合いな体躯が無様に蠢くさまが、白けかけた侍達の嗜虐心を再び煽った。
ひとりが手荒に篝の帯を解く。
「こやつ」

そういいながら他のふたりに示したのは苦無であった。
村の者なら誰でも携行している。武具としてはもちろんのこと、本来は工具であり、持っていれば何かと重宝するからだ。
しかしこの時はこれが裏目に出た。
「やはりどこぞかの素破か……それにしては大分にお粗末やったな。見目良い女(おなご)を差し向ければ、やに下がって油断するとでも思うたか……
わしも舐められたもんやの」
若侍は口の端を歪めてそういうと、呻吟する篝を覗き込んだ。
「いえ、どこの手の者(もん)や。素直に吐けば、血止めをしてやろう。今ならまだ助かるやも知れんぞ」
侍が着物を剥ぐ。血には汚れているがしみひとつない、内側から照り映えるような肌が露わになり、若侍は目を細めた。
「うぬのような年端もいかぬ半端者を使い捨てる主など見限ってしまえ。わしがうぬを飼(こ)うてやる……見目良い地虫女など、滅多には手に入らぬ代物やろうからな」
そういって耳障りな声を立てて笑ったが、篝はもう荒い呼吸が喉を鳴らすだけで、何の言葉も発しようとはしなかった。
篝の様子に若侍は身を離すと、あとのふたりにいった。
「滑稽な姿やがどうやら上物や、息が絶える前に味おうてみたらどうや」
ふたりの陽物はすでに猛りきっており、渡りに船とばかりに着物を脱いだ。血で汚れるのを憚ったためだ。
ひとりが篝の腿を割り裂き、禍々しい肉塊を篝の幼い秘所に突き立てた。
「……！」
篝は歯を食いしばった。痛みよりも恥辱よりも、何よりも於仁丸が手中の珠のように慈しんだこの身を、薄汚いもので浅ましく穢されることが耐え難かった。
於仁丸が知ったらどれほど怒り、苦しむだろうか。

いまや篝の胸にあるのは、ただひとつ於仁丸の面影のみであった。
於仁丸、ごめん……
於仁丸――
「これはたまらん……年端もいかぬくせに女はほんまにわからんの……」
荒々しく揺さぶられ、血がまた噴き出した。
「おいおい……わしの番が廻ってこんうちにこの女、死ぬのやないか？」
「そう思うならおぬしも愉しめば良かろう。女の穴はひとつやなかろうが」
そういいながら、軽々と篝を持ち上げる。もうひとりは篝の血をまぶしつけ、無理矢理後門に押し入れてきた。
篝は己れの身が裂ける音を聞いた。
「なにがひとつやなかろう、や。ひとつになってもたやないか」
いわれた侍は下卑た笑いを漏らしながら、手を伸ばし先刻放り投げた苦無を拾い上げると、篝の薄い胸に浅く突き立て一文字に引いた。
「……っ」
篝が大きく息を呑んだ。ぐったりしていた体がわななく。
「これはええ。ぎゅうぎゅう締めつけてきよるわ」
侍はげらげらと声を上げて笑った。
うちは……死ぬのか……
篝は濁った意識の中で思った。
いやや、死にとうない……！
うちは死なへん
絶対――うちは――
「たまらんな……まったく女は死にかけが一番味がええ」
ほどなく侍達は果て、うち捨てられた篝に今度は若侍が近づいた。
篝はすでに虫の息である。全身は蒼白で、体中の血があらかた流れ出してしまったことが見て取れた。

「ほんまに女はしぶといの……まだ生きておるのか」
そういいながらしゃがみ込む。
「うぬは何(なん)や……なんで悲鳴のひとつもあげん？」
篝はやはり答えない。尤も答える意志があったとしても、すでに言葉を発せられる状態ではないことは若侍にもわかっていた。
「誰に義理立てしとるのや。哀れなやつ……うぬが死を賭けて庇ったとて、誰も助けにはこんぞ」
「……」
篝の耳には若侍の言葉など入ってはいなかった。
途切れそうになる意識を懸命に支えながら、ただひとつことだけを念じていた。
うちは死なへん……
うちは……絶対……
うちが死んだら……於仁丸が……
若侍はおもむろに小柄を引き抜くと、篝の腹に突き立てた。げぶ……っ、と喉を鳴らし、血の塊が篝の口から吐き出される。
若侍はそのまま腹を裂くと、そこに左手を突っ込みかき回した。
臓腑(はらわた)の痙攣と熱さを愉しむつもりだったが、期待したものはそこにはもうなかった。
……どれだけ……悲しむか……
於仁丸が……うちが死んだら……
そやからうちは……絶対……
「ふん……」と若侍は鼻を鳴らした。
「なるほど、うぬは確かに刺客ではなさそうや。これだけ血を流し、臓腑を引きずりだされてなお死なんところをみると、どうやら妖(あやかし)の類やな」
於仁丸……
於仁丸……
於仁丸……
「しかし妖がどれほどしぶといものであっても、首を落とされては

命もあるまい」
若侍が立ち上がり大刀を引き抜く。
於仁丸……
おにまる――
刀(やいば)が高く上がり、そして振り下ろされた。

8

「なんや……篝はおらんのか」
於仁丸はいささか気落ちした声でいった。
お婆の屋敷の土間である。
「わしはおまえが篝と一緒におるかと思うとったぞ」
「そんなわけなかろう。今帰ったとこやぞ」
「ほんまに……そろそろ日も傾く頃やというのにのう」
「……まあええ。ほんならまた来るわ」
踵を返し出て行こうとした於仁丸は、何ごとか思い直したようにまた振り向いた。
「これ……」と包みを差し出す。
包みを解いたお婆は目を見張った。
「どないしたんや、こんな……立派なもんを……！」
「盗んできたとでも思うてか」
於仁丸がいつもの憎まれ口でいった。
「この前の礼にと、鴇様から篝に頂戴したのや……誰か腕のええ女房に頼んで仕立ててもろてくれ」
「ありがたいことや……篝に……」
お婆は丁寧にまた反物を包み直すと、それを押し戴いた。
於仁丸は外へ出た。本当は篝に直接手渡して喜ぶ顔が見たかったが、仕方がない。一日でも早く渡しておけば、仕立て上がるのもそれだけ早いはずだ。
「……」
仕立て上がった着物はどれだけ美しく篝に添うことだろう……晴れ着姿を思い浮かべるだけで頬が緩む。
道行く者が見たら、ひとりで歩きながら笑いを抑えかねている於仁丸はさぞかし胡乱に映ったことだろう。
だが一方、於仁丸は胸中に刺さった微かな違和感を拭えずにいた。

昨日、確かに篝に自分は夕刻には帰る、といった。それなのに篝はなぜいないのだろう……

於仁丸は篝が待っていることを疑っていなかったし、実際これまでこうしたときに、篝がいなかったことは一度もないのだ。

於仁丸は柑子(こうじ)色に染まり始めた空を見上げた。山の中腹にいつにない黒々とした烏の群が見える。

ふと不吉なものを感じ、於仁丸は眉根を寄せた。

於仁丸が空を見上げたその半時ほど後である。

烏の群の下には黒髪村の男が数人、いずれも厳しい表情で立っていた。

男達の目の前には無残な死体があった。切り飛ばされた手足にはそれぞれ矢が射込まれている。左足には二本の矢が刺さっていた。

露わになった股間は裂けて陵辱の跡は明らかで、四肢を失った体躯は着物を剥がれ切り刻まれ、臓腑を引きずり出されている。

傍らには切り落とされた首が転がっていた。

死肉を喰らいに来たはいいが篝の毒に動けなくなったらしい烏や小さな獣、それらの死骸までがそこここに散らばって、周囲は戦場のごとき有り様であった。

「……これは……むごい……」

ひとりがとうとう、呻くようにつぶやいた。

何よりもむごいのは、その場の夥しい血の量から、生きながらに刻まれたことが明らかなことであった。

男達は加賀からの帰りである。加賀では先頃大きな戦があり、一揆が守護を倒し国を打ち立てた。男達はその中にあり、ことの顛末をつぶさに見てきた。

たまたま近くを通ったが、烏がやたらに騒ぐので、様子を見に来てこの惨状を目にしたのであった。

「誰か村へ戻って戸板を持ってこい」

厳しい表情を崩さずひとりがいう。その目は篝をみつめたままだ。

「このままにはしておけん……」
べつのひとりがようやく気づいたようにいった。
「そうや……於仁丸……」
「あかん！」
先の男が鋭く制した。
「あれには」
知らせるな――という言葉は途中で消えた。村へ向かうために踵を返した男の視線の先、わずかな崖の上に、今知らせるなといった当の於仁丸の姿があったからだ。
いつからそこにそうしていたのかはわからない。男達が奇異に感じたのは木偶のように突っ立ったままの於仁丸に、全く表情がないことであった。
驚きも怒りも、悲しみもない――まさに人形だ。
「……於仁丸……！」
ひとりの声に、於仁丸の体が弾かれたようにびくんと動いた。
「……ア」
みるみるうちに表情を取り戻す。それは歪み、喉の奥から絞り出されてきたのはまさに傷ついた獣の咆哮であった。
於仁丸は転がるように崖を駆け下りると、何かを叫びながら走り寄ってきた。
篝の名を呼んでいるのだろうが、それは言葉にはなっていない。
男達が止める間もなく於仁丸は篝の骸をかき抱いた。於仁丸の体に押しつけられ、かつて篝であったものの中に残っていた、わずかな体液が押し出される。
於仁丸の着物と体が、赤黒く染まった。
「あかん、於仁丸――」
「篝に触んな！」
ひとりが於仁丸を引き離そうとした刹那、於仁丸は悲鳴のような声で叫ぶと稲妻の速さで腰の山刀（うめがい）を抜き、止めようとした男の胴を払った。

「うわ……っ！」
男がのけぞり、飛びすさる。
思いも寄らぬ攻撃から身を翻したのはさすがであったが、己れの前腕を掴んだ右手の指の間からひとすじの血が滴った。
「阿呆が！」
一喝したのは先刻「戸板を持ってこい」といった男である。男は山刀を振り回す於仁丸の右手を捻り取り、これを叩き落とした。
於仁丸は腕を掴まれたまま今度は右足を蹴り出した。男は苦もなくかわすと、逆に於仁丸の鳩尾に拳を突き入れた。そして掴んでいた手を放すや力任せに頬を張った。
小柄な体が吹っ飛ぶ。於仁丸は受け身も取らずに河原に叩きつけられた。
「素破が頭に血が上って、あっさり当身を喰らいおって……！」
男はいまいましげに吐き捨てた。於仁丸は体をくの字に折り、反吐を吐いている。
立ち上がろうとしても、足が立たないようだ。表情は朦朧としていて口元の汚物を拭おうともしない……どうやら意識もはっきりしない様子であった。
「早う行け！於仁丸は縛り上げろ！」
尖った声で男が叫ぶ。
「篝の血に触れた者は、川でよう洗い流しとけ」
男達は無言でそれぞれやるべきことに取りかかった。

9

夜半にひとりの男が村へと帰ってきた。
籌を河原で見つけた後、周囲を探りに行った男だ。男はすでに周辺に人影はなかった、山道に残った蹄の跡からどうやら複数の、おそらくは侍の仕業であろうが、山中軽々と籌を追いつめたところを見てもどうも並の侍ではなさそうだ、といった。
そして、どこの何者かまでは突きとめられなかった……と続けた。
「あんだけの血や、相当の返り血も浴びたやろうに、誰も見てないのか」
男の報告を聞き、その場のひとりが苦虫を噛みつぶしたような表情でいった。
村長の屋敷である。
座敷にいるのは村長をはじめ、村の主だった面々であった。
雨宮知徳は村衆を諸国に放って動勢を探らせており、今日帰還した男達はそうしたうちの一部である。今日の寄り合いはもともと他国の動向を聞くためだったが、一通りの報告のあとは話題はつい男達が帰路に遭遇した、思いがけぬ惨事に向かいがちであった。
河原で於仁丸を張り倒した男――充三（じゅうぞう）が口を開いた。
「それにしてもあの辺はもう天津の領地や。籌はなんであんなところにおったのや」
「……」
男達が顔を見合わせる。ひとりが重い口調でいった。
「今日は於仁丸が出かけとったからな……おおかた迎えにでも出て、道に迷うたんやろう」
「……」
充三は暗く厳しい表情になった。
「ほんなら籌が殺されたのは、たまたまということか？」
別のひとりがいったその時、外で叫び声が上がった。喉が破れん

ばかりの絶叫だ。
「……於仁丸……」
男達のある者は眉をしかめ、ある者は目を伏せた。
長(おさ)もけわしい表情になり、
「誰かあれの口を塞いでこい。一晩中これではたまらんわ」といった。
充三が立ち上がった。

「ええ加減にせんか……声もすっかりつぶれとるやないか」
村長の屋敷は敷地の外れにある牢の中で、充三は縛られたまま転がっている於仁丸を見下ろしていった。
しかし於仁丸は男の言葉など耳に入ってはいないようだ。身をよじると、また叫びはじめた。
充三は舌打ちした。充三は手に持った轡を於仁丸に噛ませると牢を出、座敷に戻った。
「どうや……あれは」
ひとりが声をかける。充三は頭(かぶり)を振った。
「まあ……あれを見ればな……」
「戦場(いくさば)で身内が殺されたというていちいちおかしゅうなっとったら、命がなんぼあっても足らんやろうが。わしらにとっても命取りや」
「いうてやるな……あれはその戦もまだ知らんのや」
充三は渋い表情をしたが、それ以上は何もいわなかった。
「なんにせよ、篝のことも放っておけん……どうせ篝を殺した者どもの命はなかろうが、万が一にもわしらやお館様に害意ある者の仕業なら、このままにはしておかん」
長の低い声がいった。
夜も更け、男達はそれぞれ帰っていった。
牢では於仁丸がひとり、苦しげに身をよじりながら呻き続けていた。
端正な顔は歪み、涙と涎でどろどろに汚れている。縛られた手足

や割られた顎が激しく痛んでいるはずだったが、於仁丸の涙と呻き声はもちろんそれが理由ではなかった。
於仁丸は悪夢の中にいた。
篝が走っている。己れに向かい、何ごとか叫びながら懸命に駈けているが、なぜか一向に近づいては来ない。己れもその場を動こうとせず、手を差しのべることさえしない。
やがて篝はずたずたに引き裂かれちりじりになる。己れはただそれを見ている。
そして一面が紅に染まる――
「ア……ア……ッ！」
於仁丸は汗をにじませ、轡の下でくぐもった悲鳴を漏らした。
夢と現の間で、於仁丸は篝が目の前で失われるのを、なすすべもなくくり返し見つめ続けていた。

夜が明けた。
女達がすすり泣いている。
草場と呼ばれる墓地は、村から少し外れた場所にあった。その名の通り普段は人が訪ねることもなく、草が茂るに任せた一角である。
だが今日は、そこは村人によってきれいに手入れされていた。
篝はお婆の手によって丁寧に清められ、首に巻かれた布は痛々しかったが頬と唇に紅を差し、その貌は本来の美しさを取り戻していた。
身に纏っているのは目にもあやな絞り染めの小袖だ。優しく鮮やかな緋色がこの上なくよく映えているのが一層哀れで、男達も言葉を失った。
「きれいや……篝」
「於仁丸に最後に会いたかったやろうに……」
女達が嗚咽をこらえながら口々にいう。お婆も
「……あの阿呆めが……」と呻くようにつぶやいた。
於仁丸はいまだ牢に繋がれたままであった。

10

村人達が念仏を唱え籌を埋めていた頃、雨宮の館では明日の輿入れの準備におおわらわであった。天津領まではほぼ十里、峠を越えて約一日の道程である。

「戌郎」

馬の手入れに余念のなかった戌郎は、姫の呼ぶ声に振り返った。

「すまぬが連れていく仔を選んでおくれ」

戌郎は笑顔で頷いた。鴇姫と共に裏手に廻る。屋敷の犬はもっぱらそこで飼われていた。

戌郎が選んだのは、先に黒髪村を訪ねたときに供とした犬だ。あれからふた月ほども経ち、いささか頼りなげだった仔犬もしっかりしてきた。額には純白の星がくっきりと浮かび上がっている。

「わたくしもギンが一番ええと思うてました。この仔は利口で勇気もある。あの時も、小さいのにちゃんと馬の番をしてくれたものなあ」

鴇姫はギンと呼んだその犬の頭を撫でると、嬉しそうに笑顔でいった。

「幸隆様はわたくしを愛おしんでくださるし、おまえもこの仔もついてきてくれる。わたくしはほんまに果報者や……」

だがその頬には微かに緊張が見える。

わしが必ずお守りします。そやから心配めさるな……

戌郎は心のうちで鴇姫に呼びかけた。まるでその言葉が届いたかのように、鴇姫は顔を上げると戌郎に微笑んだ。

夜が来て朝になり、出立の時刻となった。

戌郎は受け渡し役である騎馬の宿老に従い、鴇姫の輿につく。

白絹の小袖に同じく白い打掛を腰巻きにした鴇姫はまばゆいばかりの美しさで、戌郎の心を激しく揺さぶった。

夏の初め、戌郎が鴇姫と辿った同じ道を今日は婚礼の列が行く。

しずしずと輿は進み、天津領は佐々家の屋敷に着いたのは日も落ちて半時も経った頃であった。
門火は赤々と夜を照らし、一行を出迎える。
妻戸の前で受け渡しが行われ、戌郎はここで鴇姫の輿を見送った。
雨宮の姫ではなく、佐々家のお方となられた――戌郎はそう思った。それでも戌郎にとっては、なんら変わらぬこの上なき姫であった。

夜半。
婚礼の儀を終えた幸隆と鴇姫は、今は寝所にあった。
「お国を離れてよう参られた、鴇殿……長旅で疲れたやろう……」
幸隆が鴇姫を労う。鴇姫はほんのりと頬を染め、消え入りそうな声で
「鴇と呼んでくださりませ」といった。
「鴇」
微笑みを浮かべて鴇姫の手を取る。
「これからはわしがそなたの家や。何があってもわしが必ずそなたを守るゆえ、信じてついて来てほしい……」
「……はい」
うつむいたまま、鴇姫が答えた。
「心よりお尽くしいたします……どうぞ可愛がってくださりませ……」
取った手を引くと、鴇姫が幸隆の胸に身を預けてきた。
肩を抱く。少し震えているのが分かる。
「わしが恐いか」
「いいえ」
と、小さい声ながら鴇姫ははっきりといった。
「お慕い申し上げております、幸隆様。鴇の全ては、幸隆様のものでございます……」
「鴇――」

幸隆の腕が鴇姫を夜具に横たえる。
やがて鴇姫の秘めやかな息遣いが夜の静寂(しじま)を伝いはじめた頃、戌郎はそれまでいた場所をそっと離れた。
戌郎の心中は悲痛であった。もとより戌郎は己れが鴇姫を得られるなどとは思っていなかったし、それを望んでもいなかったが、ふたりが睦みあう様をまざまざと見せつけられたのはさすがに堪えた。
また大切なひとの秘め事を盗み見た、そのこと自体にも傷ついていたのである。
確かに戌郎は、いつまでも姫のおそばにてお守りする、と誓った。しかしその誓いを全うするためには何を為さねばならないか、それを突きつめて考えていた訳ではなかったのだ。
姫を守るために姫の望まぬことを為し、憎まれることがあるやも知れぬ。望まずとも心の奥襞の敏感な部分に触れ、傷つけてしまう時も来るやも知れぬ。
例えば今夜、戌郎が初夜の褥を覗き見たことを知れば、鴇姫は二度と戌郎に向かって無邪気に微笑みはしないはずだ……
「……」
戌郎は短いため息をつくと小さく頭を振り、考えても仕方のないことを無理矢理心から押し出した。そして辺りを伺いつつ屋敷の塀の影に身を潜めた。
印を切り、心を集中する。
いつもはゆるやかに閉じられている戌郎の口が、何かを語るかのように開いた。
ほどなく夜の闇の中からギンが音もなく姿を現した。
どこから敷地内に入ってきたのかもわからぬ。ギンは静かに戌郎の傍らに伏せた。
戌郎は表情を緩めるとギンの頭を撫でた。この若く利発な犬は、一切姿を見せることなく婚礼の行列に随行していたのだ。そうさせたのはむろん戌郎であった。
明日、ギンの姿を見れば姫様はきっと喜んでくださるやろう……

鴇姫の花のような笑顔を思うと、戌郎の心は少し温かくなった。
だがその朝には、新妻を迎えたばかりのこの屋敷に、不穏な知らせが飛び込んできたのである。

やって来たのは日頃懇意にしている天津家家臣、島田一正の使いであった。
人目を避けて秘かに幸隆を訪なったこの使者が語るには、昨夜、天津幸政の近従がふたり、苦しみながら果てたということであった。
奇怪なことに、このふたりの体には醜い斑紋が表れ、陽物は腐り落ちていたという。
名を聞き幸隆は眉を顰めた。それは幸政が常から側に侍らせていた者の名であったが、実のところ幸隆はこのふたりには、かねてより不信を抱いていたのである。
変死した近従は元々無宿の牢人であったのを、幸政が召し抱えた者どもであった。
素性も知れず薄暗い目をしたこれらを嫌ったのは幸隆に限らず、家臣のほとんどは疎ましく思っていたが、それを幸政に献言する者はなかった。なんとなれば幸政自身が闇をその目に飼っていたからである。
あのふたりが……
殺しても死なぬげな近従の面体を思いだし、幸隆は心中でごちたが、使者の次の言葉には思わず声が出た。
「実は……内密に願いますが――殿も床に伏しておられます」
「何……？」
「薬師の見立てでは、まずお命に別状はなかろうとのことですが……呪(まじな)いか、あるいは毒やも知れぬと……」
使者の苦しげな様子に幸隆は重ねていった。
「なんや、申せ。いわねばならんことがあるのやろうが」
使者はなおもためらっていたが、やがて重い口を開いた。
「我が主が申すには……その……

昨夜は佐々家に於かれましては、雨宮から奥方様を迎えられた由……あの、それで……」

使者はまた口をつぐんだが、ほんの少しの逡巡のあと一息にいった。

「幸隆殿が迎えられた姫君は不吉であると――もしや此度の凶事も姫か幸隆殿の画策ではないかと、かように殿が申されたということで……」

「……」

幸隆は頬をひきつらせたが、幸政の言葉については何も言わなかった。

ただ

「よう知らせてくれた。一正殿にはくれぐれもよろしゅうお伝えしてくれ」とのみ答えた。

島田一正は佐々兼嗣、すなわち幸隆の義父と供に天津の先代より側近くに仕えた旧臣で、当主幸政と今は佐々家の総領である弟幸隆の相克を知っている。

幸政も島田一正が何かと幸隆に気を配っていたのを承知していたから、これはむろん一正が幸隆の耳に入れることを見越しての讒言であった。

「えらいことになったのう……」

「申し訳もありませぬ」

幸隆は兼嗣に深々と頭を下げた。

佐々家に跡取りのなかったことは確かだが、主君の命とはいえ自分のような厄介者を迎えてくれたこの老人に対し、身の置き所もなかった。

「いやいや、そなたにも嫁御にも罪はない。これは濡れ衣というものや。

とはいえ」

先代は言葉をついだ。

「火の粉を払うのはいささか難儀やも知れぬな……」

「殿を見舞って参ります」
幸隆はそれだけを短くいった。
幸隆は慌ただしく着替えると、鴇姫には主の病床を見舞ってくるとのみ言いおいて天津の館へと出向いて行った。
「……」
「殿のことも幸隆のことも心配はいらん。ゆったりと待っていなさい」
不安げな鴇姫を先代が慰めた。
「ご挨拶もまだやというのに、お見苦しいところをお見せして申し訳ありません……」
本来なら、このひととの対面は明日のはずであった。恐縮して平身する鴇姫に、先代がいった。
「鴇姫というたな……そなたも知っておるのやな？幸隆と兄である殿とのこと……」
「……いえ……」
鴇姫が小さく答える。
兄上はわしがお気に召さぬのや……
そう幸隆から聞いたことがある。天津の先代が、どうやら最後まで兄と弟どちらに家督を譲るべきか考えあぐねていたらしいことも、雨宮の父が漏らしていた。しかし鴇姫が知っているのはそこまでであった。
幸政が天津当主となり、幸隆が臣下に下ったからには、兄弟の確執も過去のものと思っていた。
しかし佐々の舅の口ぶりでは、どうも今なお禍根を残しているらしい……
幸隆はただ主君である兄の見舞いに行ったのではないのだろうか

鴇姫は昨夜、夫となったひとが「何があってもわしが必ずそなたを守る」と、いつにない口ぶりでいったのを思い出した。
舅が去った後、不安に震える鴇姫の目に入ったのは、ちぎれんば

かりに尾を振るギンの姿であった。
「ギン！」
我知らず大きな声が出た。
「おまえ……いつの間に来とったのや」
手を伸ばし、頭を撫でる。雨宮の家を出たのはつい昨日のことなのに、懐かしさと恋しさがこみ上げてきて鴇姫は涙ぐみそうになった。
振り返ると戌郎の姿があった。
「戌郎……」
先刻までは精一杯気を張っていたが、戌郎の顔を見るともういけなかった。鴇姫の眦（まなじり）に涙が溜まり、やがてひとすじこぼれ落ちた。
「……」
戌郎は手を差しだそうとしたが、躊躇った。己れが触れていいひとではなかった。
戌郎はギンを遠ざけると、指を立て、笑顔を作り鴇姫の視線を惹いた。
それからその指を口に運び、ピピピ……と軽やかに指笛を鳴らした。
「……！」
鴇姫の表情も明るくなる。小鳥が数羽、やって来た。それは戌郎の十八番（おはこ）で、幼い頃から鴇姫が悄気かえっている時など、戌郎はよくそうやって小鳥を呼んでは姫を慰めたものであった。
鴇姫は戌郎が撒いたふすまを小鳥たちが賑々しくついばむのを愛おしげに見ていたが、やがてぽつりと口を開いた。
「……戌郎……おまえ、何があったか知らぬか……？」
戌郎は頭（かぶり）を振った。
使者と幸隆の会話は全て聞いたが、それを鴇姫に漏らす訳にはいかぬ。

ゆきたかさまが　もどられたら

きっと　おはなしが

「……そうやな……」

鴇姫は袂で涙を拭うと戌郎に笑顔でいった。

「すまぬな……おまえにはつい甘えてしもうて、涙など見せて……」

鴇姫は言い止し、また少しうつむいた。

そしていった。

「……もし幸隆様がおまえに何かを命じたら、必ずあの方のために働いておくれ。

わたくしに伺いなどはいりません。幸隆様の命(めい)はわたくしの命や……ええな」

「……」

戌郎がいつものように従順に頷かないのを見て、鴇姫は少し語気を強めた。

「戌郎。返事をいたせ」

戌郎は目を伏せたまま、頭を下げた。

11

幸隆はその日、陽も暮れようという時分にようやく帰ってきた。
長らく待たされたのであろう、足を引きずりつらそうな幸隆に、鴇姫はすぐさま薬湯を用意した。
「お殿様のお加減はいかがでしたか……？」
おそるおそる訊ねた鴇姫を幸隆は見やった。心を痛めているのがその表情からも読み取れる。
「お命に別状はない……そなたは何も心配せんでええ」
幸隆は笑顔を作るといった。しかしその笑顔にも疲労が色濃く滲んでいる。
幸隆は一息つけると、
「兼嗣殿に報告してくる」と部屋を出た。
「……」
不安げな姫の顔色が見えるようだ……部屋の外に侍(はべ)った戌郎は思った。
鴇姫の命があれば、今度こそこの後の会話を聞き取ったあとは余さず知らせるつもりでいたが、姫はついに「夫と舅の会話を諜報せよ」とはいわなかった。
兼嗣の居室に向かった幸隆を追い、戌郎も音もなくその場を離れた。

幸隆は先代に簡単に幸政と殿中の様子を伝えた。
「殿も今や一国の主となられ、また敵も少のうないお方にて」
と、最後にいささか皮肉な口調で一言を添えて幸隆がいった。
「私のみをお疑いな訳でもなさそうやったが……それでも殿に何かあれば、私が一番に疑われるのは必定や――そやから当方で必ず下手人を挙げると申し上げてきました。
出来るかどうかはわからぬが、身の潔白を証明するにはそれしか

ない……」
「うむ……」
先代は頷いたが、
「しかしこれは……殿はそなたには決して子細を漏らさんやろうし、骨が折れる話やな」といった。
「……まことに申し訳なく……」
「他人行儀はやめよ。そなたはもう、佐々家の大事な跡取りや」
幸隆を遮り、先代はきっぱりといった。
「幸隆殿ご自身がそういわれたのですぞ。わしはもう佐々家の人間や、これからはこの兼嗣を父と思うて尽くすゆえ、そのように扱うてくれとな。
わしはどれだけ……そのお言葉が嬉しかったか……」
「……」
「美しい嫁御も守ってやらねばならん。あれには何も話しておらんのですか？今朝見かけたとき、あれは涙ぐまんばかりやったが」
「……申し訳ありませぬ……」
幸隆は再度詫びると深々と頭を下げた。
老人の許を辞した幸隆は、ふと気づくと屋敷の裏手に来ていた。そこには厩があり、幸隆はその一角を姫の従者に与えていた。
狭くとも粗末でも構わぬゆえ、戌郎を他の下人と一緒には住まわせないでほしいとの姫の希望を容れた結果である。
「……」
幸隆はしばらく黙ってその場に立っていたが、やがて従者の名を呼んだ。
「戌郎」
戌郎はいずこからか姿を現し、幸隆の前に手をついた。
「よい、楽にいたせ」
また歩き始めた幸隆に従い、戌郎も後に続く。
幸隆は己れの心を測りかねていた。
戌郎の名を呼んではみたが、幸隆はこの下人が特に気に入ってい

る訳でもなければ信頼している訳でもなかった。
戌郎を連れて行けるよう父に口添えしてほしいと頼まれたとき幸隆は快諾したが、実は心中はいささか複雑であった。
鴇姫の愛や信頼を幸隆は疑っていなかったが、それとは別に姫の戌郎に対する無条件の安心を、己れに対してはないものだと感じていた。
だがそれも、ふたりが共に過ごしたこれまでの時間を思えば奇異に思うにはあたらない。これから鴇姫とふたり、時間をかけてこの上ない関係を作っていけばよい……幸隆は己れにそう言い聞かせた。
今は幼い頃から妻に付き従ってきたこの男に、問うてみたいことがあった。
「戌郎、おまえはどう思う……」
幸隆はついに口を開いた。
「殿がどうやら毒を盛られたらしい……ご一命は取りとめられたが、殿はわしをお疑いや。鴇のことも悪し様に申された。他国から来た嫁なれば、何か企んでおるに相違ない、婚礼の夜に変事が起きたはその証やとな」
「……」
姫のくだりは、幸隆は先代にも語っていない。
どうやら己れが考えているよりは、幸隆もまたこの唖の下人を信じているようであった。
「わしは殿に、必ず下手人を挙げてみせると申し上げたが……」
幸隆は言いよどんだ。
「正直なところ、どうしたものか……」
答えが返ってくる訳もない。幸隆は続けた。
「情けないこの身を晒すのは耐え難いが、……わしは知徳殿に助けを乞うつもりや」
「……」
幸隆の言葉に戌郎はいささか驚いていた。
戌郎自身、ことの真相を探るには雨宮知徳、ひいては黒髪村衆を

頼るが上策と考えていたが、その解に気づいても、幸隆は今しばらく逡巡するのではないかと思っていたからだ。
「しかしそのためには、鴇に此度の子細を打ち明けねばならん……わしはあれに心配をかけとうないし、何より傷つけとうない――」
戌郎は手を上げた。が、幸隆が戌郎の手振りを読めぬことに気づき、いったん上げたそれを下ろした。
戌郎のその様子に、幸隆も気づいて言葉を変えた。
「鴇にはいうに及ばぬか」
反応がないのを見て、新たに言葉を継ぐ。
「……では、打ち明けよと申すか……？」
戌郎は頷いた。
鴇姫の傷つく様は戌郎も見たくはない。しかし姫が知れば、必ず戌郎を頼るはずだった。
そうすればわしが動く――
「……これから鴇に話そう。戌郎、おまえも参れ」
ふたりは踵を返し、屋敷へと向かった。

大まかな経緯を聞いた鴇姫の反応は、概ね戌郎の考えた通りであった。
鴇姫は父、雨宮知徳を頼るのは少しだけ待ってくれといった。
「わたくしも雨宮知徳の娘……多少の手蔓がございます。ほんのしばらく、わたくしに時間を下さりませ」
「鴇、そなた……」
幸隆は不安を隠さずにいった。
「何か危ないことを考えているのやなかろうな？わしはそなたに危ない目を見させるくらいやったら、土下座してでも雨宮殿に助けを乞うぞ」
「ご心配は無用です。決して危ないことはいたしません……わたくしの方で対処できぬようやったら、すぐさま手を引いて父を頼りますゆえ」

幸隆はちらりと下座の戌郎を見やった。戌郎が頷く。
どうやらこの男もまた、姫のいう手蔓に心当たりがあるらしかった。
「その手蔓とやら……わしが問うても、答えはせんのやろうな」
「お許し下さい」
鴇姫は手をつき頭(こうべ)を垂れた。
「時が来れば、必ずお話しいたします」
それから戌郎を見た。
「戌郎。行ってくれるな」
戌郎は頷き、立ち上がった。

半刻ほどの後である。屋敷の裏に戌郎はギンを呼んだ。
戌郎のいでたちは多少足元を固め山刀を腰に差した他は、いつもと大差のない軽装であった。
戌郎はギンがやって来たのを見、懐から苦無を取り出すと地面に置いた。飛び苦無とも呼ぶ小振りのそれを、ギンは器用に銜えるといずこかへ運んで行った。
ギンを見送り、屋敷を抜け出す。
戌郎は閂を下ろした門は通らず塀を飛び越えた。軽々とした猿(ましら)のごとき身のこなしであった。
「此度のこと、幸隆様は知らず鴇の一存で参ったと必ず伝えておくれ。
またおまえらの主(あるじ)が父上であることは、鴇も重々承知しています。父の判断が必要やと思うたら、父に知らせてかまいません……そやからなるべく力を貸してくれるよう、おまえからもくれぐれもよう頼んでおくれ」
姫の言葉を胸に畳み、闇の中を駈ける。今宵は天空に星があり、初めての夜道でも迷う気遣いはなかった。
数刻で村に着いたが、戌郎は村の空気が常とは違うことに気がついた。

冷たく張りつめた、不穏な空気である。
「……」
不審に思いながらも当初の目的通り村長（むらおさ）の屋敷を訪ねた。
屋敷の外れの土牢に人の気配を感じ、それとなく覗き込んだ戌郎は思わず息を呑んだ。
そこにはきつく縛められ、轡まで噛まされた於仁丸の姿があった。於仁丸は目覚めていたが、生気も表情もなくまるで人形のようで、すぐそばにいる戌郎にも気づかないようであった。
「……」
一瞬逡巡したが戌郎はその場を離れた。
まずは村長と年寄りたちに会わねばならぬ。

「おお、戌郎か。こんな時分にどないした。鴇様は無事に輿入れなされたのか」
村長が気づいて声をかけた。
戌郎は頷いた。両手が上がる。

ひめさま　からの　でんごん

戌郎の手振りを読んでいた村長は、表情を引き締めると
「……待っとれ。すぐに他の者を集める」といった。

戌郎が語ったあらましはこうであった。
鴇姫が幸隆に嫁した夜に天津家の家臣がふたり、苦しみながら果てた。
幸政の側近であったこのふたりの陽物は腐り落ちていたという。
幸隆の兄であり主君である幸政にも変調が現れており、今は薬師がつききりで診ているが、どうやら毒を盛られたらしい。嫌疑は幸政と折り合いの悪い弟幸隆、その妻鴇姫にかけられている。
刺客とその目的を明らかにし、夫と己れへ向けられた疑いを晴ら

すために村衆の力を借りたい。それが姫からの嘆願である、と戌郎は続けた。

「……」

その場に居合わせた面々は、戌郎の話を聞き終えても誰も言葉を発しなかった。座敷の重苦しい空気は村を覆うそれと同じものだ。

「……？」

戌郎は眉を顰めた。

なにか　あったのか？

耐えきれず、訊ねる。

ろうで　おにまるを　みた
おにまるが　なにか　したのか

ようやく年寄りのひとりが重い口を開いた。

「……篝が殺されたのや」

「――――」

脳天を殴られたような衝撃。年寄りの言葉は耳には入ったが、言葉の意味がよく理解できない。

……篝が、殺された……？

かがりが……ころされた……

幼い頃から下男として姫の身近に仕えてきた戌郎は、篝とはほとんど触れあった記憶はない。

だが篝の愛らしさには見かけるごとに目を奪われたし、於仁丸が身を尽くし、舐めるように愛おしんでいたのも知っている。篝は死の影など微塵もない美しい少女であった。

何より先日この村で、於仁丸のそばに寄り添い輝くような姿を見たばかりではないか。

その篝が……殺された……

なぜ――
「……」
「むごい殺されようやった」
年寄りはそれだけを短くいった。
戦場で数多の死を見てきた男がそういうには、よほどにひどいありさまであったのか、と戌郎も暗澹とした気持ちになった。
それで先刻の於仁丸の、魂が抜けたようなありさまにも合点がいった。
「於仁丸の阿呆がわめくわ暴れるわでかなわんから……しょうがなくああやって牢に放り込んであるのや」
「そういえばあやつ、籌の骸をかき抱いて泣きわめいておったが」
と、別の男がいった。
「なんであやつはあれほどの籌の血にまみれながら平気でおるのや？」
「……！」
唐突に籌が殺されたと知らされ、先刻見た於仁丸の無惨な様子にすっかり心を奪われていた戌郎だったが、ここに来てようやくふたつの事件が結びついた。
天津家の怪事と籌の非業の死。嫌な符丁に戌郎の心は騒いだ。
「……あれはな」
これまで黙っていたお婆の声に、皆が振り返る。
「あれはほんの餓鬼の時分から、この婆の毒を盗み舐めておったのよ……ただ籌に触れたい一心でな」
お婆の言葉に、座敷の男達はまた押し黙った。
「於仁丸の耳にはこのこと、絶対に入れてはならん」
しばらくのちにようやく口を開いた村長は低く、だが厳しい声でいった。
「知ったらあやつ、何をしでかすかわからんぞ」
それは居合わせた者全てが抱いた、強い懸念であった。
「戌郎」

村長が戌郎を見た。
「この話、必要あらばお館様に通じてもええ、と鴇様はそう仰ったのやな？」
戌郎は頷いた。
「鴇様には確かに賜ったと伝えてくれ。わしらがちゃんと裏を取ったる……どのみち籌のことも捨ておけんと思うとったのや」
そして長は続けた。
「お館様かてせっかく鴇様をくれてやった幸隆が腹を切らされでもしたら、たまったもんやなかろうしな」

戌郎はその場を辞した後、再び牢へと廻った。
一刻も早く鴇姫の許へ戻るべきだったが、於仁丸が気がかりだったのだ。
ちょうど様子を見に来たらしい村人の手には粥の入った器があったが、これはすっかり冷えて固くなっていた。
若いこの男は
「全く食べんのや……無理矢理食わせても吐いてしまうし、もう相当に参っとるはずやが……あれは突然泣きわめいて暴れる他は呆けとるばっかりや」といった。
「よもや籌の後を追うつもりやあるまいなあ……源爺も心配なことや」
「……」
戌郎は男を促し牢の閂を外させた。
轡を外しても於仁丸は何の反応も示さなかった。ただ少し身じろぎしただけだ。
手燭の明かりの中で見ると、於仁丸の唇は乾いてひび割れ、頬は蝋のように白かった。一方縛られた手指は暴れるせいか縄が食い込み、赤黒く腫れ上がっている。触れてみると死人のように冷たい。
戌郎は傍らに座ると於仁丸を己れに寄りかからせ、腕の縄を慎重に解いた。

於仁丸の表情が歪み、呻き声が上がる。気遣わしげな素振りを見せた男を戌郎は制し、重湯を、と示した。
男が戻るまでの間、戌郎は縄を全て解き於仁丸を抱いて、腫れて痺れた手足をゆっくりとさすってやった。それでも激しく痛むのか、於仁丸は時折小さく呻いた。
戌郎の心も痛んだ。力なく身をまかせ、されるがままのこの哀れな虜囚が己れの知る於仁丸と同じ人間だとは、とうてい思えなかった。
ほんの数日前、於仁丸は快活で自信に溢れた少年だった。
男が戻った。戌郎は重湯の器を受け取るとそれを口に含み、於仁丸の頭を抱いてその口に少しずつ流し入れた。
於仁丸の喉がこくりと動く。
戌郎はそれを確かめながら、ひとつことをゆっくりと何度も繰り返した。
戌郎には生まれて間もない仔犬や目も開かぬ雛を懐で温め、乳を銜(くく)ませ擂り餌を与えて育てた経験がある。今の於仁丸はそんな幼くか弱い者と同じだ、と思った。己が命も同然のものを突然理不尽に奪われ、心をもがれたのだ。心がなければ赤子も同じ、手を貸し助けてやらねば生きられる訳がないではないか……
「……」
傍らの男はただ、戌郎がすることを見ていた。男は何も言わなかった。

戌郎が佐々家に帰り着いたのは夜明け前、七ツの頃である。
鴇姫はすでに寝(やす)んでいるものと思っていたが居室には明かりがあった。戌郎はそっと近づくと障子の桟に触れ、とんとんとん、と三度打った。
それは口の利けない戌郎の符丁であった。
「戌郎か？」
驚いたような小さな声がし、部屋の主が立ち上がり、近づく気配

がした。
静かに障子が開いた。頭を上げると間近に姫の顔があった。
「もう行ってきてくれたのか……戌郎……村長はなんというとった……？」
微笑み、頷いてみせる。
鴇姫も安堵した表情になった。

そやから　もう　おやすみなさいませ

「おまえもほんまにご苦労やった……詳しい話は改めて聞くゆえ、ゆっくりおやすみ」
戌郎は頭を下げると静かに障子を閉めた。
厩に戻り、筵の上に横になる。
鴇姫がひとりの空間を与えてくれたのは有難かった。他の者を気にせず動き、眠ることも出来るからだ。
しかしこの朝、疲れた身を横たえ眼を閉じても、戌郎はなかなか寝付けずにいた。
鴇姫と幸隆についてはむろんのこと、無残に殺されたという籌や、廃人のごときありさまだった於仁丸の姿が心をざわつかせていた。
特に気がかりは於仁丸だった。多分、於仁丸は立ち直るだろう。そして籌の仇が生きているかも知れぬことに気づく。そうなれば、躍起になって仇を捜すに違いない。
それが幸政と決まった訳ではなかったが、ほぼ間違いないように戌郎には思われた。
おそらくあの場の村衆も同じ思いであったはずだ。
そうであれば、於仁丸が辿りつくのも当然幸政ということになる。
その時あれはどうするのか――
「……」
於仁丸と戦うことになるやも知れぬ――それは予感だった。
戌郎は眼を閉じたまま、苦しげに眉根を寄せた。

屋敷の鴇姫もまた、眠れずにいた。
黒髪村の長が応といったからには、多分嫌疑は晴らすことが出来るだろう。この時鴇姫の心を占めていたのは、このことではなかった。
戌郎である。
山中を含め併せて二十里余りの往還を、戌郎は一夜のうちに走り抜けた。
鴇姫は戌郎の出自を知っていたし、常よりこの下人を頼りにはしていたが、戌郎がその異能を見せつけたのはこれが初めてだった。
父雨宮知徳が、村衆を間諜として使っていたことは知っていた。しかし己れにとっては気のいい村人でしかなかった黒髪村衆の真の姿を、鴇姫は初めてかいま見たのだ。
漠とした不安が胸中に広がった。
平生の暮らしの中では常人ならざる力など必要ない。それが必要になるのは非常時であり、すなわち今なのだ。
これから、何かが変わってしまうかも知れない――鴇姫もまた、不穏な予感を抱いたのである。

12

翌朝。
村長の屋敷を訪なったお婆は囚人に呼びかけられ、驚いて振り返った。
「おまえ……！正気に戻ったのか？」
「腹が減って動けん……何か食わせてくれ」
その声はかすれて小さかったが、以前の張りを取り戻していた。
知らせを受け、すぐさまお爺がやって来た。於仁丸はお爺に支えられ、帰って行った。
夕刻、お婆はお爺の小屋を訪ねた。
「於仁丸の様子はどうや……」
お爺は顎を少し動かした。
目線の先に於仁丸の姿がある。於仁丸は体を柱にもたせかけ、所在なげに己れの手を見ていた。
「於仁丸」
「……指が」
独り言のように於仁丸がごちた。かすれた声はそのままである。
「よう動かん……痺れて……」
「長い間きつう縛られとったらようなることや。心配いらん。そのうち治る」
お爺は近づいてそういうと、手を伸ばし於仁丸の指を優しく揉んだ。於仁丸は笑いもせず嫌がりもせず、お爺のするままになっていた。
「於仁丸」
再びお婆が呼びかける。お婆は於仁丸の前に座り、言葉を継いだ。
「わしが今日来たのはな、これをおまえに渡すためや」
そういって懐から取り出したのは、ひと房の黒髪である。紙に包まれたそれを上から束ねてあるのは、いつも篝の髪を飾っていた赤

い髪紐であった。
「……」
於仁丸の表情が少し歪んだ。
「籌にはあの着物を着せたった……それはよう似合うとったぞ……」
「籌……」
於仁丸の唇がわなないた。
「埋めたのか……籌を……あんなじめじめした、蛆や地虫がいっぱいおるとこに……」
「土が籌の毒を清めてくれる」
お婆が静かにいった。
「あれもきれいな体であの世に行けるやろ……」
「……っ」
震える手で遺髪を取ると、於仁丸はそれを握り締め顔を伏せた。
嗚咽すら漏らさず、ただ肩が小さく震えている。お爺にもお婆にも言葉はなかった。

於仁丸の声は結局元には戻らなかった。
どうやら加減も知らずに大声で泣き叫んだ結果、喉をつぶしてしまったものらしい。
夜毎にうなされているのをお爺は知っていたが、どうしてやることも出来なかった。
籌の無残な姿が、何度振り払っても瞼に蘇る。そのたびに拳が震え、暗い炎(ほむら)が心を灼いた。
しかしその怒りは、どこにもぶつけようのないものであった。籌の仇はすでにこの世にないはずだった。
以前の自信に溢れた快活さは影を潜め、人が変わったかのような於仁丸に、村人達は冷淡ともいえる無関心さを示した。於仁丸にとってもその方が都合が良かった。籌を奪われ、その仇さえ討てぬ――於仁丸には何もかもが虚しく無意味だった。
だがお爺は知っていた。村人のそっけない反応は、実は於仁丸が

仇の存在に気づくのを恐れるがゆえであることを。
このあやうい均衡は、あるときふとしたきっかけで崩れた。

その日、於仁丸が畦道ですれ違ったのは、村長の屋敷で下働きをしている男であった。
折からの突風に男が首から提げていた手拭いが飛んだ。於仁丸は難なくそれを掴み取ると、男に手渡した。
「元気そうやな……良かった」
何の言葉もかけないのは気詰まりであったのか、男はいささかぎこちない笑顔を作るとそういった。
「……」
「正直、もうあかんかと思うたが……戌郎がおって良かったな」
於仁丸が男を見た。男の表情に一瞬動揺が走ったのを、於仁丸は見逃さなかった。
「戌郎が来とったのか……？なんでや？」
「……そら、鴇様のお輿入れが無事に済んだ報告に決まっとるやろうが」
男はそれだけをいうと、そそくさと立ち去った。

「お爺」
小屋に戻った於仁丸はお爺に声をかけた。
「うん？なんや？」
お爺は機嫌良く答えた。於仁丸はすっかり無口になり、自分から口を開くこともなくなっていたから、久々に呼びかけられたことが嬉しかった。
「わしが呆けとった間に戌郎が来たのか？」
「……」
お爺の表情は少し固くなった。だがすぐそれを緩めると、いつもの調子で
「そうや。長様のところに、鴇様のお輿入れの報告に来たのや」と

答えた。
先の男と変わらない返答である。だが於仁丸は微かな違和感を覚えた。
自分が正気を取り戻したのは輿入れから2日目の朝だ。それ以前に現れたということだから、戌郎が本当に輿入れの報告に来たのなら、それは輿入れの当日深夜から翌日中ということになる。
別段必要もないのにそんなに急いて、わざわざこの村まで無事を伝えに来るものだろうか……
さっきの男が一瞬見せた表情が、小さな棘のように心にひっかかっていた。
さりげなさを装い、於仁丸は訊ねた。
「輿入れ先でなんぞあったんかな……？」
「さあな」
お爺の答えはそっけなかった。

13

正気を取り戻して以来、心身の不調もあってまるで技の修練に身の入らなかった於仁丸だったが、このところまた熱心に取り組み始めていた。

しかしお爺には喜ばしいとばかりも思えなかった。於仁丸の瞳は不穏な熱を帯び、その表情はひどく張りつめていた。

於仁丸は、なかなか痺れの取れない指先を気にかけながら考えていた。

――戌郎がこの村に現れた……

多分、婚家で何か大きな問題が起こったのだろう。そうでなければ鴇姫の輿入れの直後という時期に、戌郎がわざわざやって来る理由がない。

しかもその理由を、お爺を含めた村人はどうやら自分には知らせたくないらしい――

自分には伏せておきたい理由となれば、もう答えはひとつしかなかった。

籌に関する何かだ……

「……」

いつまでも無為に過ごしている訳にはいかない。一刻も早く勘と技を取り戻さなければ、いざというときに動けない。

もし籌の仇が生きているのなら、必ずわしが仇(あだ)を討つ……！

村人が己れに対し冷淡な無関心を示す理由にも、今はもう気づいている。於仁丸はもう、村人に戌郎について問うことはしなかった。ただ全身の神経をそそけ立たせるようにして、どこかにあるはずの微かな手がかりを感じ取ろうとしていた。

「おまえ何(なん)か……良からぬことを企んどるのと違うやろな」

その夜、囲炉裏を挟み、とうとうお爺が耐えかねたように言った。

「……」
「……於仁丸」
「良からぬことて、何や」
箸で椀の中身をつつきながら、目を伏せたまま於仁丸が応えた。
お爺はしばらく黙っていたが、やがて苦しそうに
「籌のことや……おまえ……仇討ちやの何やのと考えとるのと違うか――」と言った。
「仇討ち？」
於仁丸が顔を上げた。口元が奇妙に歪んでいる。
「そら仇が生きとればな。わしが必ず殺してやる……そやけど」
「……」
「どうせもうくたばっとるわ。仇討ちもしようがなかろう」
お爺は於仁丸の手が微かに震えているのを見た。於仁丸は椀と箸を置くとその手をもう一方の手で掴み、立ち上がった。
「於仁丸」
出て行こうとする於仁丸にお爺が声をかけた。
「籌のことはもうあきらめえ……！あれは運がなかったのや」
「わかっとる……！」
於仁丸はひとこと言い捨てると、夜の中へと出て行った。
於仁丸の心は乱れていた。
やはりお爺は気づいていたのだ……しかしそれを口にするとは、於仁丸は思ってもいなかった。
気づいていることを明らかにしようがしまいが、いわれて引く自分ではないことはお爺もよく知っているはずではないか。
なぜお爺は今に至ってあんなことを――
ざわついた心のままに夜の村を歩きまわっていた於仁丸は、月明かりに遠く人影をみとめ、慌てて身を隠した。
瞬く間に心のざわめきは重く沈み、頭が冷たく冴えてくる。
人影は村の者だがここしばらくは見かけなかった顔だった。尤も村には常に人の出入りがあったから、これは特に奇異なことでもな

かった。
しかし今の於仁丸は、常と違うことがあれば、それがどんなにささやかなことでも反応せずにはいられなかった。於仁丸は秘かに男を尾行(つけ)た。
男は村長の屋敷へと消えた。
「……」
村長の屋敷に忍ぶのはさすがに拙い。於仁丸がこれまでにこなしたことがあるのは取るに足らない間諜ばかりであったが、本来村長の所に集まる諜報がどういう類のものかは承知していた。
余計なことを聞いた上に見つかりでもしたら、その場で殺されても文句はいえない。
於仁丸は近くに身を潜めたまま、男が出てくるのを待った。
半時ほどの後、出てきたのは先の男ともうひとり、これは四十がらみの与兵衛という男である。
迷ったが、於仁丸は与兵衛の小屋へと走った。
与兵衛には妻子がある。ふたりの会話を何か聞けるかも知れない。
待宵の月が辺りを明るく照らしていた。その分影は暗く濃い。
於仁丸は小屋の影へと身を潜めた。
屋内の会話が聞こえてきた。
「ホラ、もう寝え」
「いやや、また明日からおらへんのやろ？お父が帰るまで待っとる！」
「明日だけや。近くまで行くだけやから出かけるのも昼からやし、明後日には戻る」
それだけ聞けば十分だった。於仁丸は与兵衛が戻る前にその場を離れた。

最終話

天津領は東を雨宮領と接し、三方を山に囲まれ南には平野が開けた国である。

領内をほぼ縦断する川は美津川といい、雨宮領の山中に源流を発し、天津領を経て隣国へと続いている。

天津領の中心地は、この川岸の段丘に広がっていた。

だが与兵衛はこの町には入らず、隣村へと向かっていた。

於仁丸も後を尾行る。

与兵衛は午前中に村を出、街道に出る前に商人のなりに着替えていた。一方於仁丸は渋染めの上下、腰に山刀をたばさみ懐にも幾ばくかの武具を呑み、足元は脚絆と革足袋で固めている。

いささか剣呑ないでたちであったが、於仁丸には往来で見咎められない自信があった。

姿を見せなければいいだけだ。

手甲には得物である夜条をたっぷりと巻きつけてある。

このため普段は縫い込んで短くしてある上衣の袖は長く落ち、於仁丸の腕は指先まで隠れていた。ありていにいえば戦仕度である。

与兵衛と争うつもりはもとよりなかったし、何より与兵衛の用向きは籌には全く関わりのないことかも知れなかったが、於仁丸は万に一つの念を入れたのだった。

日が落ちて小半時もした頃である。

田畑を過ぎ小振りな集落へ入ると、与兵衛はとある武家の門をくぐった。

於仁丸も忍び込んだ。そしてそこが鴇姫の婚家、佐々家の屋敷であることを知った。

「……」

掌が汗ばんでいる。於仁丸は胸中で真言を唱えながら、奥歯を強く噛みしめた。そうしなければ口から心臓が飛び出てきそうだった。

座敷では、鴇姫が幸隆に与兵衛を引きあわせたところである。
「よう来てくれた。わしが佐々幸隆や」
「与兵衛と申します。この度は鴇様の命により、まかり越しました」
そういって頭を下げつつ、与兵衛は続けた。
「無礼を承知で申し上げます……これからの話、幸隆殿にのみお聞きいただきたく……」
「……鴇」
幸隆は鴇姫を振り返った。
「わたくしはすぐに下がりますゆえ、気遣いは無用です。与兵衛と申しましたな、よろしゅう頼みます」
あとで茶などお持ちしましょう……そういって鴇姫は去り、座敷にはふたりの男が残った。
「ちょうど良い……わしも鴇のおらぬ場で、おぬしに聞きたいことがあった」
鴇姫が去ったのを確認し、幸隆が口を開いた。
「何でしょう」
「ぬしら何者で鴇とはどういう関係や？あれに聞いても答えぬでな」
与兵衛は顔を上げ、幸隆を見た。口元には笑みを含んでいる。
「鴇様が申されぬことを、わしが語るとお思いですか？」
「……」
「今は黙ってわしらをお信じくだされ」
与兵衛はそういうと、話を続けた。
「腐って死んだという侍のことや……あれらはその二日前、国境の山中で娘をひとり嬲り殺しにしてましてな」
「……」
幸隆は眉を顰めた。
「この娘、実は毒を持ってましてな。侍が死んだのはまあ、おのが非道の報いというやつや」
「……娘が毒を？なんでそれがわかる？」

「近隣の村の者が骸を見つけました。切り刻まれた骸はもとより、死肉や血を啜りに来た獣や烏の死骸までがそこら中に散らばって、それはひどい有り様やったとか……」
「……」
「娘の骸に触れた者には、かぶれたようになった者もおるそうや。そら男の摩羅なんぞひとたまりもないわなあ」
与兵衛はなぜかくっくっと喉の奥で笑いを漏らした。
「……それは気の毒なことやが……やったのがあのふたりとなぜわかる？」
「侍の屋敷にて裏を取りました。二日前、上機嫌で血の付いた着物で帰ってきたそうや。どなたとご一緒やったかも掴んでます。下人らがこそこそ噂しとりましたわ……腐って死んだは殺された者の祟りに違いないとな……」
ここでまた、与兵衛は口元を歪めた。
「この分ではわしらが何もせずとも、早晩領内に噂が広がるやも知れませんなあ」
幸隆にはとうてい笑える話ではなかった。
それは屋根裏に潜んだ於仁丸も同様であった。

幸隆が与兵衛の話を辛抱強く聞いていた頃、戌郎は他の使用人に頼まれて鉈を研いでいた。本当は日が暮れる前に終わらせたかったのだが、雑用にかまけて遅くなってしまったのだ。
ようやく研ぎ終えた鉈を持ち戌郎は下人小屋へ向かったが、ふと違和感を覚え立ち止まった。
「……」
今夜与兵衛が来ることは知っていた。この違和感は与兵衛ではない。
戌郎はギンを呼んだ。
ギンはほどなくやって来た……が、どうも様子がおかしい。心許ない足取りで尾を下げ、しきりに鼻を鳴らしている。

「――！」
戌郎はさっと頬を緊張させると、足音もなく屋敷へと走った。
「まあさようなことにて」
座敷では与兵衛が話を続けていた。
「御身の無実は明白にございます。刺客などというものももとより存在せぬ……」
「しかしそれを証明するのは難しかろう……その村の者に話をさせても、信じていただけるかどうか……」
「さあそのことでございます……」
与兵衛は身をかがめるようにして声を落とした。
「これから話すことは、今、ここだけのこととしていただきとう存じます」
「……？わかった」
幸隆は怪訝そうな表情をしたが、素直に応えた。
「……実は先に申し上げた殺された娘というのは、わしらに縁（ゆかり）の者にございましてな」
「……！」
思わず顔を上げた幸隆だったが、次の刹那、顔色を変えた。
「待て……！それでは――」
「さよう、いささか厄介な仕儀と相成りました……
全くの偶然とは申せ、無関係を証すはずが、鴇様もご存じの娘とあってはなあ」
「……」
幸隆は眉根を寄せ、口元を手で覆った。
与兵衛はそんな幸隆に頓着するふうもなく、例のいささか皮肉な調子で続けた。
「その上失礼ながら天津の殿様幸政殿は、弟君がお気に召さぬご様子。それでのうてもご自分も毒に当たって死にかけた挙げ句、不具になってもうたとあっては、幸隆殿が何をいうても納得する訳がお

ませんわな」

天津幸政――！

全身の毛が逆立った。於仁丸はその名を目のくらむ思いで聞いた。

その時である。座敷では障子が音もなく開いた。

思わずそちらを見やった幸隆は、その場に控えているのが戍郎であるのを見て取った。戍郎の指は唇に当てられ、静かに、と示している。

次の刹那、戍郎は立ち上がりざま座敷に飛び込み、手にした鉈を天井に向かって投げつけた。

天井板が割れて吹き飛ぶ。

「！」

鉈は反射的に身を反らした於仁丸の脇腹をかすめ、梁にめり込んだ。

座敷のふたりも立ち上がった。

「くせ者や！」

与兵衛が手裏剣を撃つ。

軒裏を破る音がした。戍郎はもう一本の鉈を掴むと外へと走り出、そこにある影に向かって撃った。影の長い腕が動いたかと思うと、鉈は戍郎に向かいうなりを上げて返ってきた。

戍郎はそれを拳でたたき落とした。

雲が切れ、望月が姿を現す。

戍郎と与兵衛は月明かりにその影の顔を見た。

「……」

縁側では手燭の明かりが揺れた。

呆然とそこに立っていたのは鴇姫である。

「っ！」

戍郎が駆け寄り鴇姫を抱きしめて飛びすさるのと、姫の手を離れた手燭の燈芯が切られて落ちたのはほぼ同時であった。

その刹那、影は何かを地面に叩きつけた。

ばしん！と大きな爆ぜる音がした。騒ぎに屋敷の者が集まってきた。一帯に煙と異臭が立ちこめる。
幸隆は耐えきれず激しく咳き込んだ。喉も目も、焼けつくように痛んだ。
「目ぇをこすったらあかん！水で洗いなされ！」
与兵衛が袖で口元を覆ったまま叫ぶ。
「誰も近寄るな！水や！」
戌郎は鴇姫を抱き、これを庇ったたまま縁側から転げ落ちた。そのまま風上へと逃れると姫から離れ、夜空に向かって鋭く指笛を吹いた。
ほどなく現れたのは隼である。それは羽ばたきながら戌郎の腕へと降りた。
与兵衛は矢立を取り出すと何ごとかを書きつけ、こよりに撚って戌郎に渡す。戌郎はそれを隼の脚に嵌めた環に結びつけた。
隼を据えた腕を空へと突き出す。隼は大きく翼を広げ舞い上がり、羽ばたくと旋回して夜空へ消えた。
ほんのわずかな間のことであった。
「……」
幸隆は痛む目でこの間の戌郎と与兵衛を見ていた。
半ば呆然とした面持ちである。
幸隆は婚礼の前、戌郎も引き受けたいと申し出たときの雨宮知徳の言葉を思い出していた。
「よろしゅうございます。幸隆殿が承知なら、あれも連れて行きなされ。あれは鴇の機嫌をとるのが誰よりも上手いでな」
そういって笑ったあと、知徳はこう続けたのだ。
「戌郎はああ見えてなかなか使える男や。あれの能は何も鴇のお守りだけやない……いずれ幸隆殿のお役にも立ちましょう」
その時幸隆は曖昧に笑顔を返しただけであった。
知徳殿は、あの時本気やったのや……幸隆はようやく知徳の本心に気がついた。

戌郎は鴇姫のみならず、幸隆をも守るために雨宮家から送り込まれた番犬なのだ。
鴇姫が嘆願したからではなく、ましてや自分が口添えしたからでもなく、最初から知徳殿はそのつもりやったのや――
そして戌郎自身が己れの役割を十分に心得ていることも、今しがたの働きを見れば明らかであった。
鴇姫もまた、初めて目にした戌郎の、鬼気に満ちた形相と身のこなしに圧倒されていた。
ためらうことなく影に向かって鉈を投げ、逆に飛んできたそれを素手で打ち落とした。
鴇姫を守るために跳んだときも、何の躊躇もなかった。
そして隼――
鴇姫は戌郎が隼を操るのを初めて見た。１０年以上を身内も同然に過ごした戌郎、よく知っていると思い込んでいた存在が実はその力の大半を隠していたことを、鴇姫は今夜こそ思い知ったのである。

「……戌郎……！」
ようやく絞り出したような、鴇姫のわななく声に幸隆は我に返った。
戌郎はすでに外縁に座らせた鴇姫の傍らに跪き、姫の着物の泥を丁寧に払っていた。表情には厳しさがまだ残っていたが落ち着きを取り戻し、その手の動きにも先刻鉈を掴み投げた荒々しさはなかった。
「何や……あれは……さっきの……」
戌郎は目を伏せたまま、鴇姫の着物を払い続けている。よく見ると右手の袖口が裂け、血が滲んでいた。どうやら先刻叩き落とした鉈の刃が触れたらしい。
「鴇」
幸隆の声に鴇姫は弾かれたように顔を上げた。
「幸隆様……！

あれは……さっきの……」
声を震わせ、ひとつことを繰り返す。その表情は歪み、大きな瞳からは今にも涙がこぼれ落ちそうに見えた。
「もう今夜はやすみなさい。わしはまだ与兵衛と話がある――戌郎」
戌郎は振り返り、声の主を見た。
「鴇を連れて行け。鴇、戌郎の手当をしてやれ」
戌郎は立ち上がると、ためらいがちにうながすように鴇姫の肩に触れた。
鴇姫ものろのろと立ち上がった。
「おまえらももう行け。片づけは明日でええ」
幸隆は集まった使用人の不安そうな顔に向かっていった。
「きつくいうておくが今夜のこと、他言無用や。互いに話してもならぬ。何かわしの耳に入ってくるようなことがあれば、必ずその舌を抜いてやるからそう思え」
幸隆の隻眼には鋭い光があり、その声は厳しかった。
これを穏やかな若当主とばかり思っていた佐々家の使用人は、初めて見る主人の激しさにたじろいだ。

於仁丸は月に向かい、夜を駈けていた。
戌郎は隼を放っただろう。佐々屋敷を脱出した時、於仁丸は戌郎の指笛を確かに聞いた。
望月は禍々しいほどに皓々と輝き、白く明るく夜を照らしている。
隼は間違いなく、於仁丸より先に黒髪村へと辿り着くはずであった。
わしは何もわかってなかったのや……
於仁丸はあふれそうになる涙を必死で堪えながら駈け続けた。
村衆が隠していることを知るとはどういうことなのか、本当には何も理解していなかった。
お爺にも二度と会えぬ。
与兵衛、すなわち村衆とことを構えることになるやも知れぬ、と

までは考えたのに、なぜお爺の姿も見ず、声もかけずに黙って出てきたのか……

せめてひとこと……ただたわいないひとことで良かったのに……

お爺は今頃、夜更けても戻らぬ於仁丸の身を案じているに違いなかった。

そして明日、早ければ今夜中にも於仁丸の出奔を知るはずだ。

於仁丸は激しく悔やみ、己れを責めていた。

村へ戻れば仕置きが待っているのは目に見えている。於仁丸が恐れたのはそのことではなかった。

復讐の目は失われ、二度と村の外へは出られないだろう。少なくとも仇である隣国領主、主家の姫が夫の兄が滅びるまでは。

もう村へは戻れない――

それでも於仁丸は、来た道をひた走った。

夜半、於仁丸が姿を現したのは黒髪村ではなく草場であった。

正気を取り戻した後も、どうしても訪うことの出来なかった場所だ。

しかし今夜は、於仁丸にはここに来なければならない理由があった。

村ではおそらく、すでに捕縛の網を張っていると思われたが、ここにはまだ人影も気配もなかった。

赤い花が一面に咲き乱れていた。すでに傾きかけた月の光に、真紅が妖しく浮かび上がって見えた。

花の血の色を踏みしだき、於仁丸は歩く。

まだ新しい土の盛られた跡があり、於仁丸はそこに跪いた。

懐から取り出した苦無で盛り土を掘る。しばらくそうしていると見覚えのある布(きれ)が出てきた。

於仁丸は用心深く一層掘り進め、やがて苦無を傍らに突き立てると手を使い始めた。

「……箒」

震える声で小さくその名を呼ぶ。
於仁丸は土の中に両手を差し入れ、それを掘り出した。
かつては愛しい籌であった。今は変わり果て誰もが目をそむけずにはいられないそれを、於仁丸はためらわず胸に抱きしめた。
「わしと行こう、籌……約束したやろ……ずっと一緒や……」
着物の袂を切り、それで籌の首を包む。
於仁丸は丁寧に土を埋め戻すと、包みを抱いて立ち上がった。
この日を最後に於仁丸は村から姿を消し、二度とここに戻ることはなかった。
小さな影が夜の闇へと融けるのを、草場の赤い花だけが見送った。

於仁丸出奔／了

最終話（後書き）

一章了。
お読み下さった皆様、ありがとうございました。
二章もまた、こちらに投稿の予定です。そのうち見かけましたら、
読んでやってください。
また何か感想などありましたら、ぜひお聞かせ下さい。
評価もいただけましたら幸いです。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2496e/

紅蓮の鬼ノ壱　於仁丸出奔

2010年10月8日11時59分発行